
私の神社へいらっしゃい！！

五門玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の神社へいらっしやい!!

【Nコード】

N6310T

【作者名】

五円玉

【あらすじ】

煩惱まみれのムフフに生きる青春中学生の市沢和也は、とある理由から煩惱を制御出来る鋼の精神を求め神社へ神頼みへ。その神社で出会ったのは、自称神様と名乗る犬耳尻尾ぺちやぱい少女で……
——— 煩惱中学生と犬耳少女が送る、ちよつと……いや、かなりぶっ飛んだ神社繁栄神様コメディー!!!

第一幕 白犬神社のぺちゃぱい神様（前書き）

こんにちは！！

作者の五円玉です！！

今回は以前短編で掲載した「私の神社へいらっしやい！」の連載バ
ージョンです！

で、第1話の今回はその短編をまるまる掲載！

2話以降からが短編の続きとなる新ストーリーとなります！

なので、短編の方を見たことのある方は1話をすつとばしても大丈
夫！

短編未読の方は1話からどうぞ！

第一幕 白犬神社のぺちゃぱい神様

“ポロリ”と言う言葉がこの世にはある。

ポロリ……何とも響きのよいその言葉、それは我ら青春男子憧れのシチュエーションである。

世の中の青春男子達よ、是非想像して欲しい！

ある夏の海……！

君は友達と海水浴に来ていると思え！

その友達の中には、君の気になるあの子も含まれているぞ！

気になるあの子はもちろん紐ビキニ！

暑い太陽の下、気になるあの子と海で水の掛け合いっこ……くう……！

やべ、これ熱中症になるわ。

そしてある時、突然大きな波が来て……

ざっぷーん！

きゃー私の水着流された見ないで……となる……！

男なら、見てみぬフリしてこっそり観賞するのがセオリーだ!!

そして……

きゃー○○君のえっちすけっちなわんたち……となり、お互いに笑
いあい、そして二人きりで旅館に……

ムフフッ!!

「……っていう夢見てたら見事に朝寝坊したので、学校に遅刻しま
した」

「……ほほう」

現実と空想の狭間、はたしてそれはどこに……

僕の名前は市沢 和也。

今年で立派な15歳、現在中学3年だ。

好きなモノはムッフ、嫌いなモノは獅子唐という、至って健全な中学生と思っしてほしい。

現在僕は、素晴らしすぎるロマンチックな夢をみたせいで、盛大に寝坊。

見事に学校に遅刻したのである。

「市沢……お前教師に喧嘩売ってんのか？」

現在校門前。

そこにいたのは、生活指導教師の中津。

その曇り1つないスキンヘッドに、黒いサングラス。

オマケに平成の夏目漱石を見せつけられているような、見事な髭。

ドン・ブラコもビックリだぜ！

だからコイツ、影では「やっちゃん」なんて噂が立っているのは、内緒だからね？

「いや、だから本当に旅館に行きまして、いやー恥ずかしい電気消してー……な夢を見てまして」

やっちゃんに嘘は効かない。

現にそれは「脱衣麻雀界のタイガーマスク」と自称している僕の友達が寝坊で遅刻したときに、

「すみません、今朝道中で車にひかれ、死にかけのメイドさんをおぶって病院まで行ってたので遅刻しました。感触的にあれはCです」などという嘘兼妄想に対し、

「そうか、とりあえず先生と一緒に病院へ行こう。それとも児童福祉センターか？」

と言う言葉と共に脱衣麻雀界のタイガーマスクを瞬殺したのだ。

結局、脱衣麻雀界のタイガーマスクは児童福祉センターではなく、職員室に引きづり込まれ、1時間のお説教を喰らったと言う。

彼曰く、

「やっちゃんじゃなくてさ、美人でボインで色気ムンムンの女性教師だったら、もう1時間説教受けてもいいのになー」

とか言っていた。

まあ、後に彼の後ろでそれを聞いていたやっちゃんが、

「そうかそうか、てめえ反省してねえな？」

と、半ば彼を拉致し、再び職員室でお説教1時間をしたと言う。

話がそれたな。

現在僕はその脱衣麻雀界のタイガーマスクの二の舞にならぬよう、
本当の事を言って、許しを乞う作戦に出ているのだ。

……しかし、現実はそんなに甘くはなく、厳しいものだ。

「……市沢、お前放課後職員室に來い」

と、案の定すんなり通してくれたやつちゃん。

しかし、裏を返せば

『放課後つてのは授業終わりだ。これなら、長い間お説教が出来る
な！』

という意味にもなり、つまりは今日、この学校でリアルジャック・
バウアーごっこが展開されるというフラグにもなるのだ。

絶対逃げ切ってやる。

お説教は獅子唐の次に嫌いだ。

……まあ、お説教の相手が美人な女性教師なら……って、それだと
脱衣麻雀界のタイガーマスクと同じだな。

「市沢ってさ、まさに煩惱が服着て歩いているようなモノだよなー」
と、最近友達にこのように言われる。

「歩く18禁」

って言うってくるヤツもいる。

「出た、エロチックバイオレンス！」

って、女子からは白い目を頂戴していたりもする。

僕はそう言われるたびに、いつも反論するのだ。

「思春期男子がピンク色想像して何が悪いッ!!」

羞恥心0男、変態、ある意味神様……等々、あだ名は多数。

しかし、これはマジだ。

世の中の思春期と呼ばれる男達は皆、紳士の皮をかぶった妖怪「真

夜中布団の中でムッフ星人」なのだ。

絶対そうだ！！

夜な夜な布団に潜り、昼間の理性の皮をぶち破り、本能赴くままの獣へと変貌を遂げるのだ！

何が万年発情期な市沢だ！

貴様らも心の中では万年発情期だろうが！！

ビバ・青春！！

しかしながら、最近つくづく思う。

煩惱まみれもいいのだが、やっぱりたまに邪魔になる時もあるなあ
と。

この前、学校のテスト期間の時。

赤点を取りたくなかった僕は、そのテスト期間中だけムフフを封印し、机に向かった事がある。

あの時は必死だった。

……しかし、僕の意味とは無関係に、本能は俺の体の中で暴れ回る。

特に下半身。

もうね、勉強開始して僅か1時間たらずで僕の理性崩壊。

ネットサーフィンを開始。

僕は男になった……

今年中学3年、もう高校受験は近い。

なのに、常日頃から空から裸の女の子降って来ねえかなあ……などと淡い期待に胸を馳せているこの現状では、非常にマズイ!!

テスト勉強をしても、僕の頭の中はいつもピンク色に染まりきっている。

さすがに、これではマズイ!!

とりあえず高校には行かないと!

ムフフも大事だけど、

高校受験もつと大事!

ってな訳で

「どうか僕のムフフを自分で制御出来るような、鋼の精神を僕にください……」

近所の神社。

僕は賽銭箱に10円玉を入れて、両手をパンパン。

そう、神頼み。

ちなみに僕は今、汗まみれだ。

あ、決してホテルからの帰りとかではなく。

さっきまでやっちゃんとリアルジャック・バウアーごっこやってたから……。

まあ、見事僕は学校から逃亡に成功し、今ここに至る。

「どうか神様、僕に鋼の精神を……あと、めっちゃ可愛い幼なじみと、年上のセクシーなお姉さんと、語尾ににゃんを付けるボインなメイドさんと……」

……煩惱は尽きない。

「あと、モデルの友達と美人教師と、笑顔チャーミングなプリティおにゃの子と……」

あれこれ、50近くはお祈りしただろうか？

そのうち49個は僕の願望でもある。

叶うといいなあ。

「……でもまあ」

さすがに気前のいい神様でも、10円で50個の願いを叶えるなんて、きっと割りに合わないだろう。

少なくとも、僕ならそう思う。

10円じゃ僕の愛読本「お姉さんといっしょ」すら買えないし。

あれ、結構いい情報乗ってんだよね。

「仕方ない……お供えモノでも置いてくか」

僕はプリントでごしやごしやになったカバンの中をあさり、あるモノを取り出す。

「じゃーん！ カルシウムたっぷり骨つ子クッキー！！」

説明しよう

カルシウムたっぷり骨つ子クッキーとは、見た目骨形の美味しいクッキーである。

カルシウムたっぷりⅡ精力付くと判断した僕が毎日常備している、いわゆるオヤツだ！

「これなら神様も第2ラウンドへっちらだぜッ!!」

僕はクッキーを袋ごと賽銭箱の前に置き、神社を去る。

フッフッフ、これで僕の願いも叶った同然!

「ヘッヘッへ、きっと明日の天気は晴れのち女の子だウヒョヒョヒョ!!」

そしたらどうしよう!?

傘じゃなくて、布団を座して歩かなくちゃいけない!

「まさにパラダイスや!!」

そんな事を思って、神社の鳥居を抜けようとした、

その時:

「わーっ! カルシウムたっぷり骨っ子クッキーだあ!!」

賽銭箱の方から聞こえる、小さな子供のような声。

……賽銭箱? 子供の声?

そう考えている間にも、賽銭箱の方からは

「うわぁ……まるまる一袋もっ!!」

……僕は瞬時に理解した。

そう……きっと近所のガキが、神様の夜の栄養源を奪い取ろうとしているのだ……と!!

これは由々しき事態!

そのクツキー無いと、神様が女の子を降らせてくれない!

明日晴れのち女の子にならない!!

神様第1ラウンドで力尽きちゃう!!

「全く……」

僕は仕方なく回れ右をして、再び賽銭箱の前へ。

そこには、思った通りに子供が……って、

「あれ？」

そこにいたのは、僕と同じくらいの年齢をした、女の子だった。

巫女装束を身に纏い（うわ本物初めて見た）、その腰部分からはふわふわ尻尾が顔を覗かせている。

……ん？ 尻尾？

そしてその頭には、これまた柔らかそうな、いわゆる犬耳が2つ：

……ん？ 犬耳？

もしかして……

「コスプレ？」

一方の女の子の方はクッキーの袋を手に取り……

ビリビリッ！！

開封しやがった。

「あ、こらお前ッ！！」

僕はちよつと怒りながら彼女に接近。

だが相手は奇跡のコスプレ女の子。

ここは慎重に行動し、なんとかフラグを……

「んあ？」

神様の夜の栄養源を食べながら、彼女はこちらへと振り返った。

赤に近い茶色のショートな髪。

その大きな瞳も、髪と同じ色をしている。

……カラーコンタクトか？

そして可愛い顔立ち。

多分年齢は僕と同じくらいではないか？

身長はちょっと小ぶり。

巫女装束から見えるその腕は細く、無駄肉の影もない。

……ぶっちゃけ、マジ可愛いわ！

ただ……その犬耳犬尻尾は一体？

そして……服の上から推測するに、残念ながら彼女はぺちやばいだ。

形すら無いに等しい。

「あゝあ……惜しいな……」

ついつい小声だが呟いてしまう。

一方の彼女は……

「……………み、見られたッ!!」

何かフリーズしつつも、めちやくちゃ焦っていた。

え？

「うそ……やばっ、に、逃げないっ!!」

何故か急にフリーズが解け、あさつての方角に走り出そうとしている女の子。

彼女の声、意外といいな……じゃなくて。

「あ、ちよつと……」

その……神様の夜の……その……

ってか、次の瞬時

「うわっ!!」

ズデーンっ!!

何もない石畳の境内で、彼女は顔面からすっ転んだ。

派手に。

大きな鈍い音と共に。

そして、その手に持っていた神様の夜以下略がキレイに辺り一面に散らばった。

「……お、おい。大丈夫か？」

さすがにあれは痛いぞ？

女の子、地面に倒れたままピクリとも動かない。

「お、おい……」

本当に大丈夫か？

「うう……う……う……」

コスプレ少女、体をプルプル震わせながら身体を起こす。

うわっ………すげえ鼻血でてる……。

「うう……ふうっ……ふっ……」

顔は真っ赤。

そして涙目。

「……あのさ、ティッシュあるけど……使う？」

せめてもの慈悲。

僕は制服のポケットからティッシュを取りだし、差し出す。

「うう……」

彼女は半分泣きながら、ティッシュを受け取った。

「……ふう」

「良かった……鼻血止まったみたいだね」

あれから10分。

僕とコスプレ少女は神社の境内にある、石製のベンチに腰かけていた。

いやーお尻冷たい。

非常にゾクゾクする。

冷える意味で。

「……その……あ、ありがとうございます……ます」

両鼻に鼻せん詰めたコスプレ少女は、僕に余ったティッシュを返してきた。

「いや、どういたしまして……」

僕はティッシュを受け取りながら、彼女の頭を凝視。

……あの犬耳、カチューシャタイプのモノじゃないのかな？

やけにリアルにくっついてるし。

そしてたまーに、ピクピク動いているし。

……ど、どこまでリアル設計なんだアレ？

そして尻尾も……何と言うか……こう、ピクンピクンって……。

「……あなた、私を見ましたね？」

……え？

今まで頭の犬耳を凝視していた僕の耳に、半分鼻声の彼女の声が入ってきた。

……え？

今何だった？

「え……何？ ど、どゆ事？」

必殺疑問返し！！

僕はそおつと彼女の表情を伺う。

そこには……鼻せんをした少女が、無表情で足元の石畳を眺めていた。

「……だからさ、あなた今、私を見てるわよね？」

どんな質問だ。

……いや待てよ僕。

確か少し前に、こんなシチュエーションと似た感じの場면을、ギャルゲーでプレイした覚えが！

あの時は確か……

僕が本命の子以外との会話イベントをいくつか起こし、後に本命の子から、

『他の女の子ばかり見てないで、私だけを見てよ……。ねえ和也くん、私の事、見てるよ……。ね？』

的な！！

まさかこのシチュエーション、独占欲の強い子がみせる、焼きもちパターンなのではッ!?

……いや、さすがにそれは無いか。

焼きもちも何も、このコスプレ少女と出会ってから、まだ30分も経ってないんだし。

……じゃあ、なんでこんな質問をするんだ?

「……見てるよね?」

彼女の視線は相変わらず、足元の石畳。

……まあ、彼女の本意とかは知らないけど、

「まあ……僕の視界の中には……いますね」

曖昧な僕……!!

その時……

「じゃあ……これで私の神力は……無くなっちゃったわけか……」

突然彼女は泣き出しそうな表情をいだした。

……え？

……は？

……何？

「もう……この神社はおしまいよ……」

って、その大きな瞳から涙を流すコスプレ少女。

……ちよつと待てよ！

これじゃあ何か、僕が泣かしたみたいになってない？

え、ちよつと待てよお！！

「あ……え……ちよ、キミ！ そんな泣かないで！！」

とにかく慰めなければ！！

周りから見られたら、どんな画なんだろう。

コスプレした女の子が泣いていて、それを必死にあやす僕。

なんか襲ってるみたいだね。

ノーストップポリスメン！！

「うう……もう……おしまいなのよ……」

「ノーおしまい！　ちょ、泣かないで！　大丈夫、僕は確かに煩惱が服着て歩いているようなモノだけど、そんな町行く人を片っ端から襲うような変態じゃないよ！」

「うわああああん」

より一層泣き出した。

「だあー！！　だから泣かないで！！　大丈夫、僕は貧乳よりもポイン派な人間だから！　あー違う、だからと言って貧乳には貧乳なりの良い所も……」

……僕は何を言っているんだ？

これじゃあ本当に襲ってるみたいじゃないか。

と、とにかく……

「お、お願いだからとにかく泣き止んでくれ……」

僕は深夜ポロリ番組を見るととき以上の、めっちゃくちゃ爽やかな笑みで対応。

アハッ、爽やか前歯も見せて、イツツアジェントルマン的な？

そしたら……

ドカツ！

「へぶしっ!!」

グーが飛んできた。

何故だ。

そして前歯いてえ!

顔面にグーです。

「ひつく……も、もとはあなたのせい……ひつく……」

コスプレ少女はまだ半分泣いていた。

の割には……凄い勢いのパンチですこと。

まあみんな、まずは黙って聞いて欲しい。

……僕は今、彼女いないんだ。

まあ、画面の中には山ほど……いやいや、そんな話ではなくて。

「私は……神力狛犬のコマ。この「白犬神社」の神獣よ」

……さあ読者のみんなに質問タイム!!

さっき僕を殴ったコスプレ少女が言ったのが、上記のような言葉です。

はい、意味の分かる人は挙手!!

はい回答者なあし!!

「聞いても信じないでしょうけど、私は神様なのよ!!」

へーやけにぺちやばいな神様ダナー

「ちょ、あなたどこ見てんのよッ!!」

あー後ろ向いた。

……はあ。

現在僕は、まださっきのゾクゾクする（冷える意味で）ベンチに自称神様のコスプレ少女と腰掛けていた。

そう、進展なし。

そしてコスプレ少女が泣き止んだと思ったら、突然の意味不明発言。

まさかの電波さん？

残念だ、僕はまだ電波さんが登場するギャルゲーは未経験。

「やっぱり、信じないよね……」

彼女の顔は、どこか寂しげだった。

……微妙な空気。

「……と、とりあえずつ、続きを話してよ？　そこまで言ったら気になるし！」

神様なんて信じない。

バカなの？

電波なの？

ってか神獣とか神力って何？

厨2なのアナタ？

……でもまあ、今はその話題だけが空気を和ましてくれそうな気がして。

だから僕は、彼女——確かコマだっけ？
に、話の続きを求めた。

「でもどうせ信じないんでしょ？」

「いや、信じる信じない以前に、まず話を聞かないと分からないよ
！」

一応正論だろ？

「ん……まあ、それはそうね」

そしてコマは、半ば夢物語のような話をし初めたんだ。

この世の中、日本という国には数多くの神社が存在する。

神社には神様が住んでいて、人間達はその神様から恵みをもらい、
生活しているのだ。

そして人間は恵みのお礼に、お賽銭やお供え物などを神様に与え、
共存しているのだ。

そして、その神様はどうやら獣の形をしているらしい。

○神社の神様は牛の形をした神様だ、×神社の神様は狐の形をした神様だ……みたいだ。

その獣の形をした神様の事を“神獣”と呼ぶらしい。

神獣は基本、神社の奥深くや社の彫刻、外壁に描かれた絵などに憑依し、その身を人の目から隠している。

そして神獣は、自分の意思で憑依しているモノから放れたり出来るらしく、その獣の姿を人型にも変える事が出来る。

はい小休止。

頭ん中整理してえ！

はい続きいくよ！

神獣にはそれぞれ、人間の願いを叶える力を持っている。

それはお賽銭やお供え物をし、さらにその神社で神に願いを捧げた者だけに適用する力らしい。

なんともゲンキな神様達だな……

しかし、上記の事さえやれば、神様はその神通力、つまりは願いを叶える力“神力”でどんな願いでも叶えてくれるのだ!!

まさにドラ○もん!!

……しかし、そんな神力にも弱点がある。

一度でも人間に自分の姿を見られた神様は、その神様が持つ神力の力が衰えてしまうんだと。

つまりは弱化。

つまり、人間に姿を見られた神様は神力が弱化

←

←

それだけ、人間の願いを叶えられなくなる

←

←

そうなると人間は

「なんだよこの神社、どんだけ賽銭しようが、ちっとも願いが叶わないじゃねーか」

となり、

←

←

参拝に来る人が減り、賽銭やお供え物が無くなる。

そして神社は評判ばかりが悪くなり、いつしか荒廃していつてしま
う…

← ←

そうなる、神様は生きてはいけならしい。

って言うのが、このコマって子が言った事を簡単に整理したもの。

「どうせ……あなたは信じないでしょ。私は……あなたに姿を見られたから、もう……」

コマはまた泣き出しそうな顔になる。

うーん……

僕は頭をポリポリ。

多分、みんな思う事だけど……

普通信じないよね？

だってさあ……突然神様だとか言われてもねえ……。

こんなぺったんこ少女、誰が神様だと思うか？

神様ってのは、こう……白いお髭を生やして、木の杖を持って……。

そもそも、ウチ無宗教だからさ……

クリスマスに来るサンタさん、キャピキャピのへそ出しガールサンタを希望しているくらいの家だもん。

もし神様ってんなら、証拠を見せ……

「……あ」

僕は見事フリーズした。

「……ん？　どうかしたの？」

コマは涙目をした顔でこっちを向いてくる。

あ、やっぱり可愛いなあ。お持ち帰りしたい……じゃなくて。

「……証拠見つけた」

僕はそっとコマに接近して、そのふわふわな……犬耳に手を伸ばした。

「え、ちょ……ひゃんっ!!」

犬耳に触った瞬間に聞こえた、超可愛い声にゾクゾクしつつも、僕はその犬耳を隅々まで触って確かめる。

「ちょ、急に何を……ひゃっ！ く、くすぐった……い……」

顔を真っ赤にして暴れ出すコマ。

その鼻にした鼻せん、ちよつと赤く染まってきたですよ？

興奮すると血は止まりにくくなるんだぞ？

知ってた？

「ちよつ離してっ！！」

その時、コマがあまりにも暴れるからつついっつい手を離してしまった。

ああ……超ふわふわだったのに……じゃなくて、

「あの犬耳……リアルに頭から生えてる……」

何だあの感触？

初体験だよあんなの！

何あの手触り！？

つつい犬耳を離れた両手の平を凝視してしまう。

「ちよつと！ い、いきなり何なのよ！？」

コマは顔を真っ赤にしながら、自分でその犬耳をちよいちょいじくっている。

……やっぱり可愛いなオイ。

しかし……

「お前……本当に……本物の神様なん？」

こんなぺったんこ少女が神様なんて……

いやしかし、あの犬耳は確かに……

「本物の神様よ！ 何度言ったら分かるのっ！！」

いや、そんなに何度も言っていないだろぺちゃぱい。

「だからさっきからどこ見てんのかよ変態っ！！」

そう無い胸を隠すな。

それも立派なステータスだぞ少女。

しかしながら、あの犬耳を触ってしまった以上、本当にこの子は神様なのか！？

見た目普通の女の子だぞ（犬耳と尻尾を除く）！？

けど……

やっぱり、僕を初めて見た時の慌てっぷりや、涙ながらに語る神様の話からして……

「……分かったよ」

僕はそっとベンチから立ち上がる。

コマは、そんな僕を大きな瞳で見つめていた。

「君は本当に……神様なんだね？」

僕はコマの瞳を見ながら聞いた。

「……うん」

彼女は……ゆっくりとうなずいた。

「そうか……」

やっぱり非現実的だなあ。

でも……

「って事は、その……神力や神獣ってのも……」

「だから本当だって……」

彼女は力なくうなづく。

だとすると……

「じゃあお前、今僕に見られているって事は……」

すると、コマはか細い声で泣き出した。

「そうよ……もう……私には神力なんてのは……」

……やっぱり、女の子の涙なんてのは嫌いだ。

僕の妄想彼女もそうだけど、基本女の子は笑ってなくちゃ。

涙を流すなんてより、笑顔の方が断然に可愛い!!

あの脱衣麻雀界のタイガーマスクだって、

「女の涙ってのは……その女をダメにする害虫みたいなもんなのさ」

って言ってたし!

まあよく意味は分らんが。

ってか、比喻の仕方が壊滅的におかしいが。

……やっぱり女の子には、笑顔でいて欲しい。

「……よし決めた！」

僕はついつい大声で叫んでしまった。
何事も勢い大事！

「今日から僕は、この白犬神社の副神様になるっ！！」

「……えっ？」

コマは涙目ながらも、僕の方を向いた。

「僕は今日からこの神社の副神様！ みんなの願いを叶える、煩惱だらけの歩く18禁神様だ！！」

この子の笑顔が見たい。

ただ、それだけの理由でいい。

「……あなた、だって人間……」

「ああそうさっ!!」

僕は神社の賽銭箱の前に立ち、コマを見つめる。

「確かに僕は人間だ、神力の無いただの人間だ!!」

イツツアヒューマン。

「けれど……きっと頑張れば人の願いを叶える事が出来る! 神力が無くたって、きっと願いを叶えられるさ!」

「……………っ」

「僕は決してこの神社を荒廃になんかさせない! この神社の評判を落としたりなんかしない!」

多分、いや絶対だ!!

「何で……」

その時、コマの重たい口から言葉がこぼれた。

「何で……今日初めて会ったばかりの私のために……ここまで言うてくれるの?」

彼女の声が、だんだんと大きくなっていく。

「何でこんな……神様なんて言う馬鹿げた話をする……私のために……」

「女の子にはさ、いつでも笑顔でいて欲しいんだよ」

僕のその言葉に、コマは驚いた表情を見せる。

「君が最初、神様の夜の……じゃなかった。骨っ子クッキーを持っていた時の笑顔をさ、僕はまた見たいんだよ」

……そう、あの無邪気な笑顔。

「だからさ……」

僕はコマに手を差し伸べた。

「一緒に、この神社を繁栄させていこう！」

この子は可愛い女の子でもあり、神様。

僕はあの時彼女が流した涙を、信じる。

「……ううつ」

彼女は泣きながらも……僕の手を掴んでくれた。

「……まあ、元は僕が君を見ちゃったのがいけないんだし」

……けど、あの時僕が君を見たからこそ、

この出会いがある。

「一緒に、頑張っていこうか！」

「……うん」

その時コマは……その泣き顔の向こうに一瞬だけ……笑顔を見せてくれた。

とても……可愛いかった。

こうして僕は、この白犬神社の副神様（自称）となり。

本当の神様と一緒に、神社繁栄を願って人の願いを叶える、半ば肉体労働を共にしていく事となったんだ。

「……そういや結局、僕の鋼の精神って願いはどうなったんだ？」

あれから1週間。

僕は相変わらずの変態っぷりで、クラスのみんなからは
「エロ市沢」
ってあだ名まで頂戴した。

……あ、そういや！

「まだコマに、僕の名前教えてなくねッ!？」

いつもコマには「あなた」や「あんた」呼ばわりされてたからさ。

ってか、よくそれで1週間持ったな……。

「……まあ、今日改めて自己紹介するか」

名前も知らない人と神様やるなんて、意外と警戒心薄いんだなコマ。

白犬神社の境内。

僕は缶ジュースを片手に、神社のすぐ側にある石の狛犬の前へ。

そして、辺りを確認。

……辺りに人の気配なし。

野外プレイの気配もなし。

ならよし。

「……コマ、辺りに人はいないぞ」

僕は狛犬に向かい、声を掛ける。

すると石の狛犬が淡く輝き出し、その石の狛犬の前に小さな光の渦を出した。

その光から、1人の少女が姿を現す。

「ほれお土産。オレンジジュース飲めるか？」

「大丈夫、前にお供え物で貰って飲んだ事がある！」

少女——コマはその尻尾を右に左にゆらゆら揺らしながら、僕の差し出したオレンジジュースの缶を受け取る。

「そういやさ、あんた何て言う名前なの？」

「うお、どストレートに聞いてきた!？」

まあ、どっちにしても言う予定だったのだが。

コマは缶のプルタブを開けながら、石のベンチへ着席。
ふっふっふ、相変わらず可愛いなあ

画になるよホント。

「僕の名前は市沢和也、現在中学3年生！好きなモノはムフ……いや、有りすぎて言えない。嫌いなモノは獅子唐、よろしくね（ウインク）!!」

「ふーん……」

「ウィンクふーんで流されたッ!!」

気合い入れてやったのに!!

さて、気をとり直して。

僕はジュースを飲んでるコマの隣に座り、賽銭箱の前を確認。

……いくつかお供え物がある。

「コマ、今日はいくつくらい願い事きた？」

お供え物の数的に……2、3個って所か？

「えーと……ナカザワって人が猫を探してるってのと、カトウって人が世界征服したいって。あとはタナカって人が孫の健康祈りに来てた」

コマはジュースを飲みながら答える。

「そうか……叶えられそうなのは猫の搜索くらいだな」

僕は人間だ。

世界征服なんて叶えられっこない。

孫の健康は……まあ、果物とかを届けるとか？

「コマ、そのナカザワって人、何か猫の特徴とか言っていなかったか？」

「えーとね……ミケでメスで小さくて……赤い首輪してて、名前はニャン吉って言ってた」

「……お前、結構記憶力いいな」

僕にもそんな記憶力があれば……

ムフフな事に役立てそうだな……

例えば、エロ本を書店で立ち読みして、その写真を頭の中にインプットすれば……買わずに済む！！

……じゃなくて。

「よし、じゃあコマ！ ちよっくらニャン吉を探しにいこう！」

コマはもう神力を失っている。

だからその犬耳尻尾や憑依の瞬間さえ見られなければ、人前も大丈夫。

尻尾は袴の中に入れちゃって、耳は帽子でカモフラージュ！！

ちょうどコマもジュースをのみ終えたみたいだし。

「じゃあ行くか！」

「……うん！」

こうして、神様の力を持たない神獣と、煩惱まみれの人間との、神
社繁栄物語は続くのでした。

第一幕 白犬神社のぺちゃぱい神様（後書き）

多分、更新速度はバカみたいに遅くなると思いますが、宜しく願います！

次回より短編の続き、新ストーリーとなります！

第二幕 超理不尽なクラス委員長のお願い

ちょっと個人的な話なんだけどさ。

人の足の事を言うときに、素足って言うのは何か普通じゃん？

で、裸足って言うとか何か野蛮なイメージあるじゃん？

でさ、生足って言うとか何かエロいよね？

なんか「生」って字が妙にエロスだよね。

うんエロス。

……まあ、つまり何が言いたいのかと言うとだねワトソン君。

言い方次第ではさ、お説教とか、エロスにならないかなあ（遠い目）。

「市沢っ！　なんでお前はいつもいつも遅刻ばかりしてんだ！」

このやっちゃんもエロスにならぬものかね……

まあ、なったとしても軽くお断りだが。

奇しくも前回同様、学校に遅刻し校門前でやっちゃんの説教を喰らっている僕は市沢和也。

ムフフに生きる中学3年生さハニー。

「市沢、なんで今日も遅刻したんだっ！」

やっちゃんキレ気味。

「いや、あの今日は神様やって遅れました」

僕、ものは試しに事実を話してみる。

「神様だあゝ！？」

うわ、モーレッツに信じてねえなこのハゲ。

僕、市沢和也は人間兼神様である。

正確には人間兼神様もどきである。

あの日、僕は自称神様の犬耳ぺちゃぱいと出会った。

そう、神様の夜以下略を貪り食おうとしていた所を僕は見てしまい、神様の力を失った神様。

そして、彼女の流した涙を信じた僕は今、その神社の副神様もどきとして絶賛肉体労働中なのである。

今朝は3丁目の鈴野さんの願いを叶えていたので遅刻したんです（庭の害虫駆除）。

……疲れた。

神様は願いを叶える所を人に見られてはいけない（らしい）ので、鈴野さんの起床する前の時間に庭に忍び込んで、コマとずっと害虫駆除してたんですよ。

「いいか市沢、遅刻の理由をそんな空想のせいにしちゃいけないぜ」

「信じてよやっちゃん、ガチで俺神様なんですよ」

「……おい市沢、やっちゃんって何だコラ！」

「あ、やべ、口滑った。今のは内緒だよっちゃん」

「市沢ッ!!」

「だあつ、またしてもリアルジャック・バウアーごっこの幕が上がっちゃった!!」

さあ、いまからジャック市沢は頑張る事になりそうだ!

「はあ…はあ…あ……し、しんどい……」

結局僕は逃げ切る事に成功。

これでやつちゃんとは32戦24勝。

まあまあの戦歴だな。

で、今汗だくになりながら教室へ。

「暑い……汗が……やつちゃんめ……」

愚痴を言いつつ自分の席へ着席。

すると……

「おい、今日のエロ市沢、何か汗だくだぞ？」

「まさか……朝から強姦とか？」

「うわ……だったらヤバいな」

「どうする？ ポリスメン呼ぶ？」

……おやおや？

クラスみんなが何やら小声で話をしつつ、僕から離れていくよ？

清純少年市沢和也とは僕の事！

そんな時……

「ちよっと市沢ッ！」

みんなが離れていく中、僕に特攻隊の如く突っ込んでくる女子が1人。

ショートな黒髪、女子としては平均的な身長、一切の着崩しのないブレザー制服。

そしてこちらまあまあサイズの双丘。

至って真面目な雰囲気的女子。

……誰？

「ちょ、委員長！ 市沢に近付くとエロが移りますよ！」

「委員長、はやく逃げて！ 襲われますよ危ない！」

「市沢ッ！ 委員長に手を出したらアンタをぶっ殺す！」

わー、クラスの連中が騒ぎ出した。

「みんな大丈夫。私がクラス委員長として、このバカに一言言っ
あげるから！」

特攻女子——ああ、ウチのクラスの委員長さんなのか。
知らなかった。

そして委員長さん、俺の机に手のひらバシーン。

「あのだ市沢、アンタがそうやって汗だくだと、みんなが迷惑する
んだけど！」

「うわ、なんか早速理不尽な意見きた！！」

汗だくが迷惑だなんて……体育の時とかどうすんの僕！？

「それから息をはあはあするな！ 息吸うな、息吐くな！」

「わお、遠回しに死を願われとる！！」

「いっそのことこのクラスからいなくなれ変態っ！！」

「……なんでだ。まだ僕今日、変態行為一切してないのに……」
理不尽。

「……ってな事があったんだ。助けてコマえもん!!」

「……私、猫じゃなくて犬なんだけど」

放課後、白犬神社の境内。

例のゾクゾクする石ベンチに腰掛けているのは、ぺちやぱい神様の

コマ。

犬耳尻尾はマニアの間で需要高し。

「つてか、アンタが変態なのがいけないんでしょ？」

「変態言うな、変態紳士と呼べ！」

全く……

「それより、今日もお願いが来てたわ！」

「ああ……」

コマに促され、僕は賽銭箱の中とお供え物チェック。

……賽銭0

……お供え物、バナナのみ。

「……………」

「今日はね、カトウって人が世界征服を……」

「バナナで!？」

世界征服したけりゃ1億円くらい賽銭しろやカトウ!!

つてかカトウって人、前にも確か……

「……にしても」

毎回賽銭チェックしててつくづく思う。

この神社、本当に参拝客少ないな。

町の外れという神社の立地条件を差し引いたとしても、かなり少ない。

だって昨日は鈴野さんからのお供え物のみ。

一昨日に至ってはお供え物0。

お供え物や賽銭で命を保っているコマにとって、これはかなりキツイのでは？

「どうする？ カトウって人の願いを叶えてみる？」

「叶えられる力が僕達にあつたらな」

生憎人力では無理だ。

コマの神力も弱っているし。

本当にこの神社を繁栄させる事、僕に出来るのかなあ？

「……でもまあ、もし超可愛いキャピキャピナスのお姉さんが参拝に来たら……僕のやる気はアップするのにな」

お注射かい？

もしくはマッサージ？

ウヘヘ！！

「……アンタ、本当に変態なのね」

白い目でこっち見んなぺちやぱい。

そもそも、鋼の精神うんぬんの僕の願いはどこに……

その時

コツコツ

「……ん？」

「……足音？」

突然辺りに響いた、階段を昇るような足音。

あ、ちなみにこの神社、目の前には数段の階段があるんです。

……ってか

「参拝客じゃね？」

「……あ！」

足音は見事に階段の方から。

「ヤバイ、とにかく一旦隠れなきゃ……」

「コマ、とりあえずこっちに！」

僕は慌ててるコマの尻尾を掴み、強引に引っ張りながら神社の境内にある大木の裏へ。

「あ、コマ暴れるな！」

「暴れてない！　ってか暴れないから尻尾から手を離して！」

「尻尾？　あ、ごめん！　掴みやすそうな場所がここしかなくて……」

「もう……尻尾は狛犬の神にとって凄くデリケートな場所なんだからっ……！」

「デリケート……あ、もしかして感じた？」

「変態ッ……！」

ドカツ……！

「痛ッ！！　グーで頭殴るなぺちやぱい！」

「ぺちやぱい言うなっ！」

ドカッボカッグチャッ！

「あー痛い痛い！！　目はやめてえ！！」

「……っ！！」

ドカッボカッグチャッ！

「ぎいやあああああ！！」

暴力反対っ！！

その時。

「神様、どうかお願いします!」

賽銭箱の方から聞こえた、女性の声。

僕は未だに鬼神化中のコマを押さえつけながら、大木から顔を少しだけ出す。

「あ、ちょ、頭押さえるな変態!」

シカトシュート。

にしても、あれは女性の声だった……もしかしてナースさんかっ!?

しかし、そこにいたのは……

「どうか……ウチのクラスにいる変態（市沢）が、何等かの理由で死にますように……」

賽銭箱の前で手を合わせ、願いを語る少女。

市沢和也ブラックリストであの少女を検索、検索時間0. 1298秒、検索結果を脳内に表示します。

……佐薙中学校3年1組クラス委員長、真田穹音と判別。

そうです、今朝新たにブラックリスト入りを果たした、あの特攻理

不尽委員長!!

「ってか、願いが僕の死ッ!？」

ゴオオオオオ!!

その時、背後から凄まじい殺気。

僕、恐る恐る振り返る。

そこには……

「願いを叶える、それが神様の役目!」

どこからか持ってきたであろう、巨大な石のハンマーを構えたコマ。

「ちよおっ!! まっ、ばかつ、たんまっ!」

やべえ!!

これ僕死ぬっ!!

「アンタも一応神様もどきなら、殉職は本望のハズ!」

「え、これが神様の殉職なの!？」

ってかまだ死にたくねえ!!

「くられ、1tハンマー!!」

「1tッ!？」

ぎゃあああああ！！

逃げないと死ぬ！

けどこの大木の陰から出ると委員長に見つかる！！

でも逃げないと死ぬ！

でもまだ僕は死ねない！

ベッドの下のエロ本処理してからでないと死ねない！！

けど……多分委員長に見つかっても、なんか色々とまずくて死ぬ！

つまり……

「僕は死ぬしか選択肢がないのかっ!？」

「かくごっ!！」

ぎゃあああああ！！

何だかんだで僕が走馬灯を実感していた時、委員長はまだ賽銭箱の前で手を合わせてお願ひ中。

そして……

「神様、どうかあの変態（市沢）に死を。　そしてもう1つ……」

その時、委員長は突然辺りをキョロキョロ見渡して、回りに人がいない事を確認し……

「ど、どうか私の……こ、この……せ、性癖が治りますように……」

僕は走馬灯の中のムッフフ時代の自分を見て爽快感を共感しつつも、しっかりと現代のその委員長の言葉を聞いていた。

委員長の願い。

それは僕の死……ごほんごほん。

あー、これはナッシングな方向として。

委員長の性癖？

これは……何？

第三幕 煩惱中学生のグダグダなストーキング

「あんたが教室にいただけでみんなが迷惑するの！ だから早く教室……いや学校……いや地球……いや、この銀河系から出ていって！」

「そんな宇宙規模で嫌われてんの僕！？」

あれから翌日。

朝、僕こと市沢和也が学校へ登校し教室に入った途端、早速クラス委員長の真田穹音から銀河外への強制立ち退きを要請された。

「とにかく死ぬ市沢！ 万年発情期の最低男！！」

ぶはあっ！

こやつ、ピンク色を何だと思って……

「女の敵！ 売春帝王！ 幼女虐待！ わいせつ男！ 強姦変態！ 社会のクズ！」

「ちょっと待て、確かに僕はムフフ大好きだけど、犯罪にまでは手を染めた覚えはないぞ！？」

見に覚え無し。

「黙れ変態！ この露出野郎！」

「だから露出なんてやってないってば！ しかもそんな趣味ないし！」

まあ、露出があーだこーだの女の子ビデオなら……ムッフ。

「嘘つけ！ どうせあんたん家には露出系のビデオとかあるんですよ？ キモすぎ！！」

「ぐあっ何故それを……じゃなかった。とにかく僕はノーマルな健全中学生だ！」

「何がノーマルよ、この人間界の変態廃棄物！」

「変態廃棄物って何！？」

とにかく、今日は朝から生討論会という、ハードすぎる内容で今日がスタートするのです。

先ほと言った通り、僕はムッフに生きる健全ピンク色中学生だが、今まで一度も犯罪に手を染めた事はないんだよ。

いや本当！
信じて！！

……しかしながら、僕は今非常に犯罪に近い事をしていた。

キンコンカンコンコン

今日も1日学校が終わり、放課後のチャイムが鳴る。

日頃の僕ならグラウンドの隅っこへ移動し、汗を流しながら部活に勤しむ女子の安全を守るため、観賞……もとい観察活動へと精を出す時間なのだが。

今日は違った。

「でさあ、駅前の洋菓子店のミルフィーユが本当に美味しくてさ！」

「へえ……」

「穹音、今度一緒に食べに行こうよ！」

「うん、そうだね。食べに行こうか」

……佐薙中学校校門から100メートル付近の住宅街中の普通の道路。

そこを歩き下校しているのは、我が宿敵ダースベーター……もとい真田穹音!!

隣にはお友達らしき女子も1名!

「あとさ、その店チョコレートケーキも美味しくてさ、本当にいい店なんだ〜!」

「そう言えばその店のパティシエ、最近フランスから帰ってきたばかりの超職人らしいよ」

「え、マジで!?!」

……これがガールズトークなるものなのか?

二人は互いに話しながら、ゆっくりと下校中。

仲良しこよし。

……そして僕は。

「……………」

二人の後ろ約10メートルの所にある電信柱の陰。

THE・ストーカー!!

あ、いや、別にしたくてしている訳じゃないからね!？
いや本当!!

本来だったら水泳部の練習風景の観賞の時間。

背泳ぎ万歳。

揺れる揺れる。

……しかし、実際に僕はしたくもねえ真田穹音のストーカー的な事
をしているのであって。

理由？

はい以下回想。

「うわぁ……これ、確か福澤明よね？」

「違う、福沢諭吉だ」

昨日、真田穹音が神社に参拝に来て、帰った後。

僕とコマは真田穹音が置いていったお賽銭を確認。

そしたら……

「あいつって……もしかして金持ち？」

賽銭箱の中には、福沢諭吉がこんにちはしていた。

「すごい……こんなに大金を賽銭してくれるなんて……」

コマの瞳にはマネーのマーク。

この現金神様め。

「こんなに大金貰っちゃったなら……ちゃんと願いを叶えてあげなくちゃ!!」

で、再び1tハンマーを構えるコマ。

……って、

「だからちよつと待てえ!!」

そうか、真田穹音にとって僕は1万円を払ってでも抹殺したい人間なのね。

恐ろしい……

「神様なら、腹くくって殉職しなさい！」

「ちよ、ちよつと、まだ僕生きたい！ もっとムフフしたい!!」

とにかく必死。

「コマ、とにかく一旦ハンマー降ろせ、お願いだから!!」

「じゃあアンタもお供え物しなさいよ!」

「はあ? なんつー理不尽な...:僕も一応神様もどきなのに!」

「それは関係ない! どうすんの? 生きるの死ぬの?」

「ああ生きます! 骨っ子クッキー買ってあげるから生かさせて!
そしてハンマー降ろして!」

とにかくにも、命は大事だよみんな!

で、

ボリボリボリボリ

「美味しい!」

「そりゃ良かったな」

僕はさっき買ってあげたクッキーを笑顔で食べてるコマを尻目に、ちよっとブルーな気持ちに。

「しかし……」

真田穹音……本当に恐ろしいヤツだ。

「ねえ」

「ん？」

クッキーの粉を口いっぱいに着けたコマが、さっきの賽銭の諭吉さんをひらつかせながら話し掛けてくる。

「でもさ、せっかく1諭吉も貰ったんだからさ、何か願いを叶えてあげないと可愛そうだよね、あの女の人」

「1諭吉で……ああ、でもな……」

確かに、1万も払って願いが叶わないようじゃ、神社の評判は下がる一方だしな……

かといって、まだ僕の生涯には沢山の悔いがあって死ねないし。

我が生涯に一片の悔い無し!!

みたいにはならないし。

うーん……

「あ、ねえ1つ質問！」

その時、コマが勢いよく挙手。

「ん？」

「せいへき……って何？」

真顔で言うコマ。

「……性癖？」

コマ、何故今それを……って、

「そ、それだあ！！」

僕は思わずコマを指差した。

「え、わ、私がせいへき……なの？」

「ん？ あ、違う、そういう意味じゃなくて！」

確か真田は言っていた！

自分の性癖を直したいと！！

「そうだ……真田、確か性癖を直したいって……って」

あれ？

「……………どうしたのアンタ？　突然固まっちゃって？」

コマは相変わらずクツキーボリボリ。

っておい！

「そもそも……………真田の性癖って……………何？」

はい回想終了。

つまりは今、僕は真田をストーキングしている理由ってのが、

真田の性癖を見出だす事！！

下校中、そつと後をつければ、何かしらの性癖のヒントとか出るのでは？

って思ったわけですよ。

で、

「あ、じゃあ私の家こっちだから！」

「うん、じゃあまた明日！」

学校から約800メートル地点。
ターゲット、友達と別れ1人に。

「へっへっへ、やあーつと1人になったか」

僕、思わず昨日みたビデオの中で男が言ってたセリフを口ずさんでしまった。

あ、そのビデオってのは僕の友人である脱衣麻雀界のタイガーマスクが貸してくれた路上系の女の子ビデオ……ごほんごほん。

と、とにかく

「何としても、警察に見つかる前に真田の性癖を見出さなければ！」

うん、だって捕まったらアウトだもんね。

第四幕 クラス委員長真田穹音観察レポート

真田穹音観察日記

佐薙中学3年、市沢和也

観察初日

ターゲットは放課後、友達と帰宅。
特に異常は見られない。
即行で自宅に。

観察二日目

今日も寄り道をせずに帰宅。
帰り道、友達とたい焼きの話題で盛り上がる。
ターゲットは頭から食べる人間のようなだ。
ちなみに僕は背鰭から頂く。

観察三日目

今日も即行帰宅。
真面目だ。

そろそろなんかイベント起きないと……飽きる。
ちなみに今日はお友達と因数分解の話をしながら帰宅していた。
考えられない。

観察四日目

ああ……水泳部のぷるるんが恋しくなってきた今日この頃。
今日は帰宅途中に猫と戯れていたターゲット。
観察始まって以来の初寄り道が、まさかの猫……

観察五日目

今日は土曜日で学校休み。
つまりはストーキングも休み！
キャッホー！！

観察六日目

いい加減性癖暴けとコマに怒られた。
なら自分でやれって言ったら、なんか引っ搔かれた。
人使いの荒いぺちゃぱい神様だ。

観察七日目

そろそろムフフがないとしんどくなってきた月曜日。
ターゲットはいつも通りの生活スタイル。
ムフフしたい。

一週間観察した結果。

こいつ、真面目すぎ。

和也

「……何、この観察レポート？」

僕はこの一週間、水泳部観察を我慢してまでやり遂げたこのストーリーキング日記を今、コマに手渡している所だ。

「何って……真田穹音の一週間だよ。ファンに売ったら高値で売れる！」

「いや、これじゃ売れないでしょ……」

そういうコマの目はなんか遠かった。

相変わらず参拝客の少ない白犬神社。

来るのはいつも通り、バナナで世界征服を狙っているカトウって人だけ。

「本当に真田は真面目なんだな……」

僕は例のゾクゾクするベンチに座りながら、自分で書いたレポートを何となく眺める。

真田の性癖を誇示するような事はなし。

たい焼きや猫相手にハアハアするならまだしも、これじゃ本当に真田の性癖が分からないままだ。

「……とりあえず、あと一週間だな。一週間尾行してみてもなければ、もう真田の願いを叶えるのは諦めよう」

それしかない。

だっていい加減ムフフの時間もないとしんどいし。

「そしたら、もう1つの願いの方を叶えてあげなくちゃね」

そういうコマの手には、例のあのハンマー……って

「ちょ、待て待てッ!!」

「だって片方は簡単に叶えられる願いなのよ？　だったら叶えてあげるべきよ」

コマどや顔。

「簡単につて……何？　僕の命ってそんなもんなの？」

「そんなもんよ」

「なっ、人の命を6文字で返すなッ！」

「ま、もし死んだらネクロマンサーにでも生きかえらせてもらいなさい」

「ネクロマンサーて……何故お前がそんな事を……」

なんだい？

ネクロマンサーいるなら魔装少女とかもいそうだよね。

某電ノコで変身だ！

「……とにかく、あんたがターゲットの性癖を見付けて直せたのなら、殉職は無しになるって事よ。まあ、頑張ってね！」

超笑顔のコマ。

「……早くも何？ 僕、なんか召使いの立場になってないか？」

なんかラブコメ漫画とかによくあるパターンだね。

まあ、こんなぺちゃぱいとラブっても良いこと無しだが。

「……でさあ」

「ん？」

召使いの運命を半ば拒絶しつつ、神社を出ようとした僕を呼び止めるコマ。

その体には何か、どす黒いオーラみたいなものが……。

「この観察日記の六日目、何このぺちゃぱい神様って？」

「……あ」

そういや消すの忘れてた。

「……これ、誰の事？」

「あ、いや、その、えーと……」

ヤバイ！！

目がマジだコイツ！！

「……誰よ？」

「……えーと」

「………」

「………」

「………」

「……その、そ、それは……」

「………」

「ぼ、僕の……事……かな？」

とぼけた。

「……あんたは最初から男でしょうがあっ！」

「うわー！！」

何で女性ってのは、胸の大きさにコンプレックスを持つのか？
本当に不思議な生き物だ。

まあ、確かにデカイ方が僕的には……げふんげふん。

……でもまあ、脱衣麻雀界のタイガーマスクは確か貧乳派だったよ
うな。

「くああッ!!」

「何それ？ それまさか狛犬の威嚇ポーズ!?」

「ぐあッ!!」

「だあっ痛いっ、噛み付くなぺちやばいっ!」

ガブッ

「やーめーてー!!」

観察八日目

ターゲット、いつも通りに帰宅。
つまんね。

観察九日目

今日は朝の登校時間もストーキングしてみたが、特にコレといったことはなかった。
フラグすら立たないなんて……

観察十日目

今日、ストーキング帰りに脱衣麻雀界のタイガーマスクと偶然遭遇。
公園のベンチに座り、マラソン時の乳揺れの幅について熱く語り合った。

観察十一日目

今日もターゲットに異常なし。
途中、地域パトロール中のやっちゃんに遭遇。
ジャック・バウアー再来。

観察十二日目

今日は学校休み。
来週月曜からは定期テストです。
しかし、このムフフはやめられないとまらない。

かっぱっぱえびせん。

観察十三日目

……明日までにターゲットの情報を掴まないと、僕の命が危ない事を今さら思い出す。

本当にあのぺちゃぱ……コマには困ったよ。

……コマにこまった。

……
(笑)

観察十四日目(今日)

「……ヤバいぞ、今日中にターゲットの情報を掴まないと……僕殉職しちゃう!」

今日から定期テスト期間の佐薙中学校。

しかし、僕の頭の中ではテストどころの話ではなくなっている！

「赤点よりも命！ 定期テストよりもムッフ！」

まあ、ムッフはともかく命は大事よ。

で、定期テスト。

初日の今日は国語と英語。

国語……微妙。

英語……ヤバス。

で、命の事を考えながらの地獄のテスト。

「……くそっ」

テスト終了後。

今日はテストなので、午前中で学校終了。

僕は焦っている。

英語で赤点取るかもしれない。

国語、腎臓って漢字が書けなかった。

……いや、そんな事じゃなくてだ。

「今日中だ……今日中に真田の性癖を……」

その頃、ターゲットの真田は友達と教室から退室。
帰路へ。

「……とにかく、ストーキングだな」

で、僕もそれを追って外に出ようとしたら。

「おっすエロ魔神！」

「ん？」

後ろから僕を呼んだと思われる声が。

ちなみに僕には沢山のあだ名があるんだ。

エロ魔神なんかは本人否認だよ。

で、

「なんだ……お前か」

そこにいたのは本編初登場、脱衣麻雀界のタイガーマスク!!

本名は木原 徹。

なんか名字的に叫びたくなる名前でしょ?

木イイ原くウウん!!

的な?

「なんか用かタイガー? 僕は急いでるんだけど!」

「急いでる? 何か用事あんのかエロ魔神?」

ちなみに、脱衣麻雀界のタイガーマスクの手元にはニュース番組のラベルでカモフラージュされた、女の子ビデオらしきものがある。

なるほど、この後暇なら一緒に鑑賞会でもしようって感じか?

「悪いなタイガー、今僕は武偵見習い中なんだ。申し訳ないけど、用事は明日以降に……」

まあ、僕が明日まで生きていたらの話だけど。

「そうか……武偵か……」

何故か武偵で納得気味のタイガーマスク。
ちなみにこいつ、く〇ゆ病発病者。

「……分かった。エロ魔神、くれぐれも武偵殺しには気をつけろよ！」

「すまんタイガー、じゃ、また明日！」

僕は女の子ビデオとタイガーマスクに別れを告げ、いざターゲットのストーキングへ！

ただの読者への印象付けのためだけに出演。

脱衣麻雀界のタイガーマスクよ、君の次回の出番はかなり先になりそうだ！！

で、ストーキング。

もう電柱の陰に隠れるのに慣れつつある自分って何だろうね。

自分の将来が怖い。

で！

「じゃあね穹音！」

「うん、また明日！」

ターゲット、友達と別かれた。

……いつも通りだ。

「……ヤバいぞ、このままだとターゲットは真っ直ぐに自宅へ……」

くそっ……こ、このままじゃ僕死ぬ！

ぺちゃぱい神様のハンマーにやられる！

何かイベント的なもの起これ！

……って祈ってみるけど。

「……………」

友達と別れてから、数分後。

特にこれといった事はなく、真田はもう……自宅前まで来ていた。

「……終わった」

真田穹音の性癖。

それを知るために、水泳部や女の子ビデオを我慢してまで頑張ってきたのに……なんで……

「……ちくしょうっ」

何故だろう。

目から……目から汗が止まらねえ。

今までの苦労はなんだったんだ！

ちくしょう……

「うわっ、てんとう虫だ!!」

「あっ、指のさきに止まったよ!」

「ゆー君すげえ!!」

不思議な悲しみにうちひしがれている僕の横を、ランドセルを背負った小学生達が通り過ぎていく。

……そっか。

今日はテストで午前中日課だから、下校時間が小学生とかぶってんのね。

「あ、あっちになんか虫がいるよ!」

「え、どこ?」

……小学生達は元気だなあ。

僕なんかこれから、死ぬかもしれないっていう命の瀬戸際にいるのに。

いいなあ……

ぺちゃぱい神様に縛られていない無邪気な小学生、いいなあ。

僕も自由にムフフがしたいよ……

「……小学生を僻んでもしょうがない。とりあえずはコマの機嫌を取るために、骨っ子クッキーを買って……」

今後の市沢和也命死守計画のため、作戦を練りながらターゲットの

元を離れようとした僕。

その時だった……

「……じゅるり」

「……ん？」

もう僕の体はクッキー売ってるスーパーへ向けて歩き出している。

……しかし背後から、なんかこう……フラグ的なものが……

「……ん？」

僕は何気なく振り返った。

そう、何気なく……

……で。

「……………」

後ろには、真田穹音自宅。

ターゲットは家の玄関の扉に手を掛けていて、もう既に半分開いていた。

……しかし、彼女の視線は自宅にあらず。

「今日この後、ゆー君家で遊ばない？」

「いいよ！」

「マジで？　じゃあポケ○ンやろうぜ！」

彼女の視線……それは、家の前を歩いている小学生達。

そしてその目は……女の子ビデオを見ている、脱衣麻雀界のタイガーマスクと同じ目をしていた。

……は？

ちなみに、僕は相変わらず電柱の陰からこっそりと観察中。

そして……

「うへへ……」

家の前を通過し、去っていく小学生の後ろ姿を見ながら、超真面目なクラス委員長真田穹音は、確かにそう笑った。

そう、まさに変態で欲情中の笑い方……

顔はほんのり赤く、にやけ顔。

……マジでか。

第五幕 脱衣麻雀界のタイガーマスク脳内持論第一説

人類にとって、最も賛否両論が分かれるモノ。

それは幼さだ。

幼き事が良きなのか、幼さ故に悪いのか。

ある人は言った。

『人間の本来の可愛さ、それは幼き日々の人生にある!!』

……と。

また、ある人は言った。

『まだ幼く、未熟な人間に欲情するなど、不潔極まりない事だ!!』

……と。

人類永遠の課題。

それは、幼き子供の可愛さを、性的に受け入れるのか、単純に愛くるしいと受け入れるのか。

こればかりは、自分一人では解決出来ない課題なのだ。

——木原徹（あ、脱衣麻雀界のタイガーマスクの本名ねコレ）脳
内持論第一説、幼き人に恋して何が悪い！！　より拔粹。

……いや悪いだろ。

現在僕は真田穹音の自宅前の電柱の陰にいる。

そう、目の前の小学生を見てニヤニヤしているあの女こそ、ターゲ
ットの真田穹音本人！！

あ、ちなみに僕にロリコン耐性なんてないからね？

まあ、ターゲットはロリコンではなくてシヨタコ……

げふんげふん。

男の妄想妨害だ。

とにかく、今僕はこの目で見ている。

真田穹音が小学生相手にハアハアしているのを!!

……ふっふっふ!

チェックメイトだ!!

その後、僕はしばらく張り込みを試みたのだが……

真田穹音は自宅に入り、私服（ピンク色のラブリー的なカジュアルバリバリの……）に着替え、庭にあるテラスに腰掛け、何故かそこで勉強。

室内ではなく、屋外のテラスで。

まあ、ターゲットは結構真面目に勉強しているのだが……

「なあたけし、この後暇ならサッカーしねえか？」

「おう、いいぜ！」

……真田家の前を男子小学生が通ると。

まず、声が聞こえたらビクツと反応。

で、何気ない感じで視線を自宅前の道路に。

そして、小学生を視界にとらえると……

「……ごくりっ」

唾飲み込む。

目がにやける。

ちよつと顔が赤くなる。

……そして観察していると、1つの共通点を発見した。

真田がハアハアするのは、カッコいいって感じよりも、可愛い系の男子小学生に集中しているという事。

……他称変態の僕ですが、さすがに引きました。

いくらムフフ大好き市沢くんでも、幼さという観点としてみて女子小学生には欲情しませんしね。

小学生に欲情するくらいなら、その小学生の10年後に期待すよ。

僕は妹キャラより姉キャラ萌えですから。

ってな話はどうでもよくて。

真田は小学生見てハアハアして、小学生が通り過ぎた後に毎回盛大なため息をつく。

もうそりゃ、すげえ暗いため息。

真田も薄々実感しているのかな？

自分の好みが社会的にマズイって事を。

「……つまり、真田の性癖とは幼き男子に欲情してしまうと言う、男の僕には全く分からないシヨタなるものだったのだよ!!」

「……しよたって何？」

無垢な狛犬少女の頭にはでっかい？マーク。

現在白犬神社の境内。

で、先ほど掴んだ真田情報をコマへ流し……

そう、殉職回避！！

やっほおっ！！

毎日が楽しくなるぞ！

ムフフっ！！

「……とにかく、あとは真田が直したい性癖が本当にそのシヨタな
のかを確認して、もしそうならそれを何とかする」

これが今回の目的。

「ねえ、しよたって美味しいの？」

コマが僕の服の袖をつんつんしてくるが気にしない。

「まずは、真田の本音を何とかして聞き出す事が大切だ！」

「ねえ、しよたって何味？　ってか美味しいの？」

……ふふっ、読者の諸君は今、疑問を抱いている事だろう。

そう、何故僕がこう真田の願いを叶えるのに積極的なのかと。

僕に会えば開口一番

「車に引かれて、ぶっ飛んだ先に毒蛇がいて、噛まれてのたうち回っていたら空からヘリコプターが落ちてきて、下敷きになって苦しみながら2回死ね変態」

とか言ってくる真田。

そんなヤツの願いを何故叶えるのか。

「ねえねえ、しょたって何？ スーパーとかに売ってんの？」

それは実に簡単な事だ。

……真田穹音の願いを叶えてあげる。

つまり、うまくいけば僕の株が上がるんじゃない？

以下、僕の妄想

「これで……君の社会的にアウトな欲望はなくなったよ。これから普通のムフフを楽しみな」

「い、市沢くん……」

「僕は……当たり前の事をしただけさ。君は小学生という名の呪縛に捕らわれ苦しんでいた。僕はただ、その呪縛を解いただけさ」

ニコッ

「……ありがとう市沢くん。今まで悪口言ってきた……ゴメン」

「気にするな。それよりも、普通にムフフが出来るこれからの人生、悔いなく楽しみな」

キラリンっ！

「市沢くん……」

キラキラ！

つまり、好感度アップ。

ついでに神様のおかげとか何とか言っていれば、神社の評判もアップ！
アップアップバストアップッ！！

「ふっふっふ……いいぞお……いいぞおっ！」

「ねえ、しよたってスーパーのお惣菜コーナーにあるの？」

とにかくにも、株は大事よ！

「とりあえずは真田の幼児欲情を何とかする作戦を立てよう！」

「あ、わかった！ しよたってコロッケとかの1種でしょ？ 違う？」

その日の僕は、1日中笑っていた。

ニマニマが止まらない。

株アップⅡ女の子からの評判もアップ！！

翌日、学校。

え？ 定期テスト？

ナニソレオイシイノ？

とにかく、現在朝7時！

まさかの早朝登校！

他の生徒はまだ誰もいない！

「ふっふっふ……真田の机の中に……これを入れてみましょう」

誰もいない教室、真田の席。

僕はカバンからある本を取り出す。

昨日神社帰りに書店で購入した1冊。

「小学生アイドル盛りだくさんっ！」

なる本。

……まあ、あっち系の本でございますな。

マニアアアックッ！！

そしてそれを真田の席の中にイン！！

これで真田の様子を見て、直したい性癖が本当にシヨタなのかを探るのだ！！

「ふっふっふ……さあ、どういうリアクションを取るんだ真面目ク
ラス委員長っ！？」

「……あんた、そこで何してんの？」

「あ？ お前、何って真田の幼児欲情の真意を探り……」

……え？ 人の声？

「……ひっ！」

悲鳴？

「……あ」

僕、咄嗟に振り返る。

で、何故か後ろに真田穹音がいた。
超わなわな震えているクラス委員長さん。

……え？

顔真っ赤よ？

……え？

今7時よ？

……え？

なんか、もしかして今……修羅場？

第六幕 変態神様と変態委員長のお願い

「……………」

「ひっ………」

しゅらーばあー!!

「……………」

「ひっ……ひっ………」

現状確認。

僕の手には小学生アイドルマニアック。

それを真田の机の中へ突っ込んでいる所。

……それを真田が目撃中。

顔が赤くなったり青くなったり、たまに紫になったり。

カラフルだ。

そして目はくるくる。

「あ、あああんだ、な、ななな何を私のつ、つつつ机の中に!?!」

テンパってんなあ……じゃなくて!!

しまった見られたッ!! (まあ、今更だけど)

「……………」

どうしよう……。

今は黙秘を貫いているが、いつか限界くるぞ。

「あわ……あわわ……」

ちなみに真田の目線は僕の手元、小学生アイドルマニアック。

こんな時でもマニアック!!

僕のムフフとひけを取らない執着心に拍手!

……でもなくて。

「……………うおっほん」

このままカラフル真田を見てても僕が殺されるだけなので、真田が正気に戻る前に行動にでよう!!

「わ、わたしは……か、神様だあ!」

「……………っ!?!」

僕、一か八かの賭けにでる!!

「わたしは……ち、地球人になりすまし、この人間達の行いを見守ってきた、神様なのだ! (棒読み)」

「……は？」

いかんッ！

僕のボケのせいか、若干真田が落ち着いてきた!!

真田が正気に戻った瞬間、僕死ぬぞきつと！

「き、君の願いは白犬神社の神様から聞いている。何でも君は学校のクラス委員長らしいじゃないか（棒読み）」

「……い、市沢だね？ 変態市沢だね？」

「そ、そんな真面目で良い子な君に、神様が1つ願いを叶えてあげよう（焦り）！」

「………」

いけない！

真田黙り込んだ！

目え鋭くなった！

もしかしてコレ逆効果だった!？

でももう遅い！

「あ、安心したまえ。わたしはー神様だから！ いや本当に！」

「……………」

「じゃ、じゃあそろそろ願いを叶えよう！」

「……………」

「た、確か君の願いは……しよ、シヨタコンを直した……」

ドカッ！

「痛いッ！！」

突然、グーが飛んできた。
顔に。

「……市沢」

「はっ……！？」

僕の目の前。
そこには鬼がいた。
鬼。

……鬼が。

……鬼。

「死ね変態ッ！ 地球の酸素を吸うな変態ッ！」

「ぐはっ……あ……あ……」

僕ぼろぼろ。

殴って蹴って叩かれ踏まれ、突かれて弾かれて吹っ飛ばされて、僕の全身アザだらけ。

暴力反対〜！

特にこいつはクラス委員長なのに。

「本当に最低！ 社会の底辺ッ！」

「……だ、だま……れ……」

「もう何よ！ 人の机にこ、こんな……あ、いやいや、こんないかがわしいもの入れて！」

「今の……一瞬の……恥らいは……何？」

とにかく僕、何かお花畑に行きたい気分。

でも行ったらムフフとお別れて予感が……

「そもそも、私に嫌がらせして、鬱憤晴らそうってつもりなの？ 変態最低ッ！」

「……黙れシヨタコン」

「っ……だ、誰がしょ、シヨタコンだ変態ッ！ 訴えるわよっ！」

「……お前、小学生男子に欲情してるのに、シヨタコン否定すんの？」

「だ、だから誰が……」

「それはお前だっ！」

ビシッと指差し！！

それに真田が一瞬怯む！！

「……言っただろ？ 僕は神様だ。お前の性癖くらい、とうにお見
とうしなのさ」

「ふ、ふざけるな変態ッ！ あんたいい加減に……っ！」

真田が再び攻撃形態に入っただのを見過ごさない。

僕は机に入れ掛けの小学生アイドルマニアックをバサッと開き、真田の目の前にドーン！！

と見せた。

「……っ！」

その瞬間、真田の動きが止まった。

ちなみに見せたページは小学生男子が笑顔でお風呂入ってるページ。

児童ポルノギリギリ。

「…………どうした真田穹音？」

ふっふっふ……

勝った……

「…………う、うるさいっ！　こ、こんな小学生なんか誰がっ！」

「…………鼻血でてるぞ」

「へっ？　…………あっ！！」

自らの鼻に触り出血を確認した真田は、カバンからティッシュを取り出し鼻ヘイン！

「…………その鼻血、お前が小学生男子の裸体に興奮したっていう証拠
だろ？」

「…………うっ」

僕の言葉に俯く真田。

「まさか、クラスで一番真面目な委員長、真田穹音にこんな一面があったとはな…………」

「ち、違っ…………」

で、焦り出す真田。

そして……トドメ。

「ふっ……なんだ、僕よりお前の方が変態だなッ！」

「なあっ……」

真田玉砕ッ！

ついに……ついに僕はやったよ!!

鬼の真田を撃破したよっ!!

やっほー!!

……ってのが本来の目的ではなくて。

「……………」

ちょっと涙目状態の真田。

少し言い過ぎたな。

さて、ここからが本題。

「…………でだ。真田穹音、さっき僕が言った事覚えてる？」

「……………」

「…………君の願いを叶える。僕は白犬神社の神様だからね」

「……………」

「…………あの、聞いてます？」

「……………」

あー…………黙り込んだやつたよこの人。

参ったな…………ガチでさっき言い過ぎたかな？

「…………あんたさ」

その時、真田の重い口が開いた。

「あんたさ…………本当に一体、何者なの…………」

その声は涙声。

ガラガラ気味。

「だから言ったでしょ？ 白犬神社の神様だって。まあ、実際は神様もどきなんだけどね」

ちなみに今回、僕が神様もどきだって言う事はバラさないで願いを

叶えるつもりだった。

けど、予想外の出来事（真田の涙）により、急遽変更。

バラした方が手っ取り早いと判断。

「……神様もどきって……本当にふざけないでよ……」

真田、ちよつとやけ気味。

「いや本当だって。……お前さ、2週間くらい前に白犬神社で参りしただろ？」

「……なんで……それを……」

さあ、ここから先、ちよつとだけ嘘入るぞ！

「その時さ、白犬神社の神様がお前の願いを叶えたいって思ったらしくて、肉体労働派の神様もどきである僕に相談してきたんだ」

「……………」

「どうか、あの純粋な少女の願いを叶えてやるのを、手伝ってくれ、と」

「……………」

まあ、その神様はぺちゃぱいの犬耳尻尾さんなんですけどね。

「……そんなの」

真田穹音にいつもの覇気なし。

「そんなの、誰が信じるのよ……」

その瞳には未だ涙あり。

「……僕が神様だって証拠。1つはお前が神社でお参りしたのを僕が知っている事。2つ目は誰にも口外していないお前の性癖を知っている事」

「………」

「白犬神社の神様は言ってたぞ。諭吉ありがとう、これで骨っこクッキー買えるって」

「………」

「だから僕は……お前の願いを叶える。お前が今悩んでいる事……その性癖を何とかしてやる！」

「……変態市沢」

「……え？」

え？

何で今それ言う？

真面目ムード台無し。

「あんたにどうこう言われる筋合いはないわ。 どうせ私のせ、性癖をみんなに言いつけて、弱み握ろうって魂胆でしょ？ 分かってんのよ！」

なんか徐々に復活しつつある真田。

「……そうよ、私は変態よ！ 小学生相手にドキドキしちゃう、超変態なのよっ！ ……もう、言いふらしたければ言いふらしなさいよ……」

真田は俯いたまま。

……変態が変態に向かって変態を告白。
シュール極まりねえ。

……全く。

「僕は誰にも言わないよ!!！」

「……っ!!！」

だから言ってやる。

今日の僕はシリアス担当だコンチキショー!!！」

「僕は知ってるよ……お前が小学生相手にハァハ……いやドキドキした後にする、あのため息の意味を！」

「…………っ」

もうやけだ。

ギョルゲーで鍛えたキザな言葉をくらえ！

「本当は小学生相手にドキドキするその性癖を無くしたいんだろ？
そんな自分が嫌なんだろ？」

「そ、それは……」

「お前は本気なんだろ？ だったら僕は言ったりしないよ。むしろ
応援したい。神様として、人間として！」

「ッ……」

元は自分の株を上げるためだ、コマの言いなりとしてだで関わって
きた真田穹音の秘密。

けど、真田の涙を見て……彼女の本気さを知って……なんか、普通
に何とかしてあげたくなった自分がいる。

「……だから、僕はお前の願いを叶えてやる。その性癖克服を手伝
ってやる！」

これが、僕の気持ちだ!!

「……………ふっ」

その時、真田が吹いた。

……………え？

「な、何？」

ちよっとキョドる僕。

「……まさか、変態市沢に私の弱点見破られて、さらにそれを克服させてやる何て……まさか過ぎる展開」

真田は……目に涙を貯めつつも笑っていた。

……え？

「はっきり言って、余計なお世話よ」

「なっ……!!」

なんだと!？

じゃあ何？ さっきの黒歴史と化すほどのキザな言葉どうなる？

「でも………」

「でも？」

何だ？

「あんたから言われたとしても、なんかその言葉、嬉しいかも」

「……っ?」

真田さん？

「……実際、まだあんたを信用した訳じゃないけど……」

「じゃないけど？」

真田穹音、クラス委員長。

性格は真面目な子。

「……変態市沢、私の願いを……叶えて……くれないかな？」

そんな彼女が、学校1のムフフ人間の僕を、ちょっとだけ信じてくれた瞬間だった。

「……お、おう！」

フラグ成立！

「こ、このことは……周りには秘密ね」

「わかってるよ！」

「ならよし！」

その時の真田には、若干の明るさが戻ってきていた。

ふう……とりあえずこれで一区切り。
やっと本来の目的へ移れる。

コマのためにも、真田のためにも、僕の命のためにも。

真田穹音を普通の人間にしてみせる！

「……まさか、学校1の変態に助けられる日があるなんて」

「ん？　なんか言ったか？」

「いや、なんでも」

こうして、真田穹音普通人間化計画はスタートしたのでした、まる

第六幕 変態神様と変態委員長のお願い（後書き）

変態達による変態がための変態グダグダコメディー、いかがでしたでしょうか？

こんにちは！

作者の五円玉です！

たまには後書きらしい後書きでもという事で、今回後書きります。

今回の作品は作者の作品上、生徒会シリーズに次ぐ変態ばかりの小説となっています。

毎日が発情期の主人公市沢くんや、真面目クラス委員長だけど幼い子大好き真田穹音。

出オチ常習の脱衣麻雀界のタイガーマスク、ヒロインなのに出番少ないワガママっ子コマ。

作者の作品の中では類をみない程のぶっ飛びっぷりと自認しております、はい。

でも書いてて楽しいです！

今作は神社や神様をテーマに、参拝客の人には言えないコンプレックス等をどうしていく……って感じを目指していたり。

方向としては基本ギャグ&コメディーでいきたいです！

まあ、たまぁにラブコメっちゃったり……でもまあ序盤はないな。

とにかくにも、変態ばかりでお送りする今作

「私の神社へいらっしゃい！！」

も、いよいよ次回から真田穹音編、後半戦に突入！

相変わらず更新速度は亀並みに遅いですがこれからもよろしく願います！

ではまた次回で！

以下おまけ。

コマ

「あれ？　なんで今話は私の出番がないのよ！　私一応メインヒロインなのに！」

市沢

「おちけつコマ」

コマ

「けつって何よけつって!!」

市沢

「仕方ないだろ！　僕だってもっとムフフなシーン欲しいよ！　ハーレム作りたいんだよ！」

コマ

「私だって……出番や骨っこクッキー欲しい!!」

脱衣麻雀

「俺はギャルのパンティが欲しい！」

コマ

「誰ッ!？」

市沢

「なっ……名前の表記が……脱衣麻雀で……可哀想すぎるぞ脱衣麻雀界のタイガーマスク！」

脱衣麻雀

「神龍よ、ギャルのパンティをおくれ！」

市沢

「どこの悟空だお前……ってか、ついでに僕にもパンティおくれ！」

コマ

「……不潔っ！」

第七幕 恐怖と痛みの行進曲

某日放課後、佐薙中学校歴史資料室。

ここは日頃、歴史の授業の時以外は全く使用されない部屋である。

つまり、人気がない。

しかし、今日は違った。

「ではこれより、定例会議を執り行う」

歴史資料室の中。

そこには、4人の男。

まずは一人目!!

全てのムフフは僕のもの!!

世界中の青春を求める、飢えた狼!!

市沢和也ッ!!

「どーもっ!!」

お次の二人目!!

世の中の幼さに感謝!

下は0歳、上は15歳までOKのエロス界のロリリーダー!!

脱衣麻雀界のタイガーマスクッ!!

(本名 木原徹)

「幼稚園の前通ると興奮しますが何か？」

3人目ッ!!

熟れる事に意味がある!!

ギャルゲーではいつも教師ルートを攻める、大人のエロス!!

真中貴司ッ!!

(本編初登場)

「おばあちゃん相手に妄想できますよ俺」

四人目っ！！

二次元のエロスなら任せろ！！
平面世界に生きたいリアリスト！

達知太智！！

（コイツも本編初登場）

「画面の中に入りたい……」

オールラウンド

ロリコン

熟女好き

二次元エロス

それぞれ分野の違うエロスで活躍する四人が一同に介して、ムフフ
談義に花を咲かす！

「佐薙中学校エロス四天王による、ムフフ談義会！！」

毎週水曜日、放課後歴史資料室にて開催中！

「やっぱり僕は女性の鎖骨にビビっとくるんだよねえ！」

「鎖骨よりも幼い事大事！ ベイビースマイルでお兄ちゃんって言ってもらいたい！」

「いやいや、中々大人の女ってのもオツなものだぞタイガー？」

「みんなわかってない。全ては画面の中。何しても許される画面の中」

「でもさあ、僕はやっぱりちょい着崩しからのエロスがムフフっぽくて好きだなあ」

「バカ言えエロ魔神！ お前いっぺん幼稚園児眺めてみ、なんかこう……ムラるから！」

「いやいや、ムラムラするなら老人ホームだろ？ 加齢臭と白髪のコラボがたまらないな」

「……画面の中なら色んな髪のカラがあるぞ？ ピンク金髪茶髪黒髪、ツインポニーロングウェーブ」

「いやいやだから、エロスなムフフは恥じらいが大事なんだよ！」

「馬鹿やろう！　ランドセルにリコーダー、スク水が俺にとっての三種の神器！」

「俺なら口紅、ストッキング、ハイヒールが神器」

「ラッキースケベ、二次元の特権」

……なんか話が噛み合っていない気がするが、毎回毎回こんな感じで談義は行われているのである。

「なあタイガー？」

「なんだいエロ魔神？」

談義終了後。

僕はタイガーに話掛けていた。

「あのさ……ちょっと変な質問するぞ？」

「お前は昔から変だろ、今更なんだエロ魔神？」

なんか侮辱されてる？

まあとにかくだ。

「あのさ……幼さの魅力って何？」

「（ω、ω）」

ツ！？

「……た、タイガー？」

な、なんだ！？

こ、コイツ突然顔文字になりやがった！？

「……マジでか」

「タイガーどうした？　　すげえ震えてるぞ？」

「とうとうお前も……」

「た、タイガー……さん？」

「ついに……ついに……」

「おい？　タイガーさん？」

「お前もロリータの道に目覚めたのかエロ魔神っ!!」

僕、Σ（□、；）

さっきまでのあらすじ

我が宿敵である真田穹音の涙を見た僕は、彼女の願いである特殊な性癖の克服を手伝う事になった。

そしてその週の水曜日。

真田の性癖である幼い男の子ラブの克服のために、まずはその幼いって所に観点を置いた僕は、性別は違えど同じ幼い子供好きのタイガーに、幼さについて、話を聞こうとしたのだが……。

見事に誤解され、渋谷神社に戻ってきた所。

「タイガーめチクショー！ 僕はロリ耐性もあるが、基本はお姉さ

ん系が好みなんだぞ！」

「……ろり？」

僕は神社境内のゾクゾクベンチに腰掛け、拳をぐっと握る。

ちなみに隣にはコマ。

定価60円の氷菓子、ガリンガリン君紅しようが味をご賞味中（ちなみに僕の金で購入……）

真っ赤なガリンガリン君からは見事な紅しようがの香り。

……うえっ

「ちべたぁーい！」

頭押さえてもがきながらガリンガリン君を食しているコマはほっといて、僕はこれから先の事を考える。

ちなみに今、真田嬢は自宅にて勉強中らしい（もちろん屋外で）

アイツ、シヨタ治す気あるのか？

とにかくだ。

「とにかく、まずは敵を知ることからだな」

性癖を治すって事は簡単な事じゃない。

なんだって、好きなものを嫌いにならせる訳だから、相当の努力と

我慢が必要な訳で。

実際、僕からムフフをとったら……うわぁ想像出来ない。

「よし、まずはプランA実行だ！」

「うわっ、歯が真っ赤になった！」

真田穹音性癖克服計画、プランA。

それは、幼いを「怖い」と思わせる計画。

好きなモノを嫌いにさせる鉄板的考えた。

ってことで。

翌日、学校。

「おい、その18禁書目録!!」

「……なんだ？」

僕は朝早くから昇降口に張り込み、ターゲットの登校を待っていた。

そして今、目の前をターゲットが通過したので呼び止める。

「いや、ちょっとお前に相談があつてさ！」

「……なんだい？」

この超地味いゝな雰囲気を漂わせているメガネくん。

名前は達知太智。

そう、佐難中学校でエロス四天王の一角を握る、二次元界のエロキ
ングー!!

彼は10万3000冊ものエロ同人誌を脳内に記憶している事から、あだ名は18禁書目録。

「あのさ、今までお前の読んできた同人誌の中で、ヤンデレの幼い子が主役の作品とか……ない？」

「……は？」

ポカーン顔の18禁書目録。

ちなみに読み方はエイティーンデックス。

ちょっと強引か。

ちなみにコイツはイン何とかさんよりビリビリさん派。

なのでこのあだ名を本人は否定気味だったり。

「いやだから、幼いヤンデレっ子が主役の同人誌……」

「……なんで？」

「いや、なんとなく」

ではなくて。

ヤンデレってのは、一般人から見てもまさに恐怖そのもの。

いくらデレたって、殺したいほど愛してるだなんて……怖いだろ。

これを利用する。

幼い子好きの真田に幼いヤンデレっ子の同人誌を見せて、恐怖を植え付けば……

ほっほっほ。

「とにかく、なんかそんな系の作品ない？」

「うん……ないわけではないが……」

「だったら貸して！」

僕は両腕をホイッと前に出しておねだりのポーズ。

「……エロ魔神」

「あ？」

僕の目の前、18禁書目録は自分の頭をツンツンつついている。

「すまんが、そういう物は全部脳内にインプット」

「……は？」

何いってんのコイツ？

「……ほら、俺一応禁書目録ってあだ名だろ？ だから書物の内容は脳内にあって、実物は既に……」

「既に？」

「廃棄済み」

「ぐあああああああッ！！」

そうだった！

確かにイン何とかさんはそういう設定だった！

「……悪いがそういう事だ、諦めろエロ魔神。あと次から俺の事呼ぶ時は超一八電磁砲、又は一八方通行と呼べ」

「強引すぎるっ！」

僕を見下すようにドヤッて顔をする18禁書目録。

彼のどや顔（何故今したのかは知らんが）は、なんか……心底うざかった。

真田穹音性癖克服計画、プランB。

「ちょ……な、なによ突然」

「まあまあまあまあまあまあ」

授業終わりの放課後。

学校では極力僕との接触を避けたいらしい真田穹音本人を半ば強引に拉致し、校舎裏へと連行した。

「まあまあって……それよりも私、今日は早く帰って勉強したいんだけど!!」

強気な真田。

「勉強？ 屋外でか？」

「うっ……」

この言葉で真田は大人しくなる。

いやゝ扱いやすい。

赤ヒゲカートの緑の恐竜並みに扱いやすい。

でだ。

「よし、じゃあ早速シヨタ克服計画を実行しようと思います」

「ちょ、声デカイっ！」

僕はそんなの気にしない。

「ってか市沢、あんたそれ本気で……」

「では今回のプランB、名付けて（幼いを「痛み」と思わせる計画）の全てを説明しよう」

「ちょっと市沢っ！」

今回の計画は真田本人の意思が試される。

プランAの「恐怖」に対して、プランBは「痛み」。

つまりは……

「完璧だ……」

「なにこれ……リストバンド？」

場所は近所の市民公園。

この時間帯は親子連れの利用者が多く、つまりは幼い子供がいっぱい。

真田にとってはパラダイス！

そして真田の右腕に装着しているリストバンドは、佐薙中学校のエロス四天王、熟女好きの真中貴司お手製のソフトSMプレイ道具の1つ。

その名も

「ビリビリさん」
だッ！！

その名の通り、装着者が極度の興奮状態になった時、血圧の上昇に反応して微弱な電流が流れるリストバンド。

つまり……

「それ着けて今日1日この公園内散歩してみな。きっと痛みで幼さを嫌いになれる（キラッ）」

「……何か不安」

右腕のリストバンドを凝視する真田。
凄く不安そうな……。

「とにかく公園内に行こう。きっと効果は現れるさ！」

「えー……痛いのは嫌なんだけど」

「黙れシヨタコンっ！ お前はそのシヨタを治したいんだろっ！
だったら耐えろッ！」

「うるさいエセ神様ッ！ アンタみたいな煩惱バカに言われる筋合
いはないわっ！」

「あんだとっ！ お前そのリストバンド借りるのにどれだけ真中に
頭下げた事か……」

「うっさい！ こっちはそんなの頼んだ覚えは……」

その時。

公園入り口で争っていた僕達の前を、半裸の男児が通過した。

あ、ちなみに市民公園には幼い子供達が遊べるようなプールもどき
（実際には噴水みたいなヤツ）がありました……

よく、近所の子供は海パンとかで来る事があって……

たまたま、今僕達の目の前を子供が通過して……

で、

「痛ッ!!」

案の定、真田に電流が走った。

しかも、

「痛っ……ッ……ちょ、これいつまで……うあっ……」

結局長い時間電流は流れるようだ。

「すげえな……さすがは真中お手製。いかがわしい道具の製造工場に勤めている親父を持つだけはあるな」

真中の家は複雑な家庭環境下にあるのです。

「うっ……はあ、やっと止まった……」

一方の真田はやっと電流地獄から解放されたらしい。

超顔がひきつってるし。

相当痛いんだな。

なんて事をのほほんと思っていたら。

ドガッ!!

「ぐあっ!」

真田にグーで殴られた。

ってか痛いッ!!

「なっ、てめえっ、いきなり何すんだ!」

「うるさいっ! いいからコレ外して!」

スッと右腕を差し出す真田。

ちなみにこのブレスレットは鍵で取り外すタイプ。

「なんでだよ、別にいいじゃんか」

「よくないよくないッ! いいから外して!」

んだよ、せっかく借りて来たのに……

「早くっ!」

「……んだよ、わっ! たよ。だから暴れるな、そして僕を殴るな」

そう、地味に僕、殴られ続けています。
意外と痛い。

「早く早くっ！」

「まあ待て待て、確か鍵がここに……」

……アレ？

「ちょっと、早くしてよ！ 痛い嫌なの！」

「……ちょっと待て、いや少し待って下さい」

僕はポケットの中をガサゴソガサゴソ。

……あれ？

「……あ、鍵がない」

「……え？」

ってか……

「ポケットの底……破けてる？」

僕がズボンのポケットに手をつっ込むと、太ももさんとコンニチハ。

ちなみに下はズボンの裾。

つまり……

「……あ、鍵どっかに落としたかも」

「……ッ!!」

ドカッボカッドカッボカッ!!

「痛い痛い痛いっ! すみませんすみませんすみませんでしたあっ!」

「いい加減にしてよエロ市沢っ! いいから鍵を見つけてきてっ!」

「わかった、わかったから殴らないでっ! 地味にこめかみ狙わないでっ!」

アレ?

マジで鍵、どこに落としたっけ僕?

その時、悲劇の序章が幕を開けた。

プシュー……

公園の入り口、そこに今1台のバスが停車した。

キリンやパンダ、ゾウなどの可愛らしいキャラクターが塗装されたそのバスには、

「佐薙幼稚園」

と、書かれていた。

つまりは幼稚園バス。

僕と真田、思わずフリーズ。

で、バスの扉が開き、先生らしい女性が降りてきて、バスの中に向かって一言。

「じゃあいまからみんなでお水遊びしにいきましょう！ みんな準備はいいですか？」

『はーい！！』

ここからでも聞こえる、バスの中にいるであろうチビツ子達の元気な声。

僕は思わず、真田の顔を見てしまった。

「……………」

真田はただただ、ブレスレットに視線を落とし、めっちゃくちゃひきつった顔をしていた。

コイツ、もしかして電流流れ過ぎて死ぬんじゃないか、今日？

番外幕 犬と河童とエロ魔神とタイガーと佐雍中学校ロリータ愛護団体（前書き）

こんにちは！

今回はミスターさんの小説「人間社会へようこそ！」とのコラボ番外編です！！

一応、「人間社会」未読でもある程度分かるよう配慮して書いたつもりです。

が、やっぱり皆さん！

未読の方はミスターさんの「人間社会へようこそ！」を読みましよう！

そしてからこっちを読んだ方が、多分楽しめますよ！

番外幕 犬と河童とエロ魔神とタイガーと佐雍中学校ロリータ愛護団体

「なあエロ魔神、俺は近々ロリータ愛護団体って言う自警団を作ろうって思ってるんだけどよ」

「ロリータ愛護団体か……じゃあ僕はその参謀の地位にでも立候補しようかな」

「お、なんだ？ お姉さん派のお前にしちゃあ珍しい！」

「ふふっ、あくまで僕はオールラウンドだから！」

何が悲しくて男同士、ロリータの話に花を咲かせているのだろうか……

僕の名前は市沢和也。

ムフフに生きたい（希望）花の中学三年生。

隣にいるのは自称脱衣麻雀界のタイガーマスク、木原徹君（15）

佐雍中学校ロリコン保護団体の創設者にして、佐雍中学校旧型スクール水着愛好会の宣伝部長を勤めている、ロリコン界のスペシャリストだ。

「しかしタイガー、なんでまた突然、ロリータ愛護団体なんかを創設しよう？」

今は学校終わりの下校道。

お空には少女の笑顔よろしく、橙に染まる夕日がさようなら状態。

「……実はなエロ魔神、最近ここいらにめっちゃ可愛い子供が出没しているという情報が入ってな」

「おいおいタイガー、お前がいくらロリコンだからって、未成年をお持ち帰りは如何なモノかと思うぞ？」

合法、なにそれ美味しいの？
美味しくねえよ、危ないよ！！

「バッキヤヤローエロ魔神！ お持ち帰りはしねえよ、ただただ眺めるんだよ！」

今日のタイガーの顔は昨日ニュースで放送していた、児童ワイセツで捕まった田中一郎容疑者（仮名）の顔にそっくりだ。

「だからいいかエロ魔神！ 可愛い子供見つけたら、俺に報告よろしく！」

「分かったよ、とりあえず警察に報告するよ」

自称ピンクのスナイパーこと市沢和也、さすがに犯罪はダメです。

「さてと、とりあえず神社に顔出さないとな」

あれからタイガーと別れた僕は、1人町外れの白犬神社へとやって来ていた。

「可愛い子供か……子供……子供……ん？」

10年後に期待。

ってか女だよね？

「はぁ……しかし」

僕は神社の階段を登りながら、つくづく思う。

……階段しんどい。

結構な段差あります。

「毎回毎回来る度に思うけど、段差と段差の間が地味に高いっ」

かなりの大股で階段を上がる僕。

運動音痴の僕にはかなり辛く、いつしか息が荒くなる。

はあ……はあ……

……疲れる。

そして、何とか神社の境内にご到着。

ちなみに階段はほんの数段しかありません。

「はあ……はあ……や、やっと着いた……」

僕は地味に疲労している体を引きずって、例のゾクゾクするベンチに腰掛ける。

相変わらずお尻がゾクゾクするベンチだな。

冷える意味で。

しかしこのベンチ、佐薙中学校Mっ子布教協会の連中に提供したら、結構な謝礼を期待出来そうな。

sonだけゾクゾクする。

「はあ……疲れた」

僕は座りながらグイッと伸びをし、あくびも漏らす。

ちなみに目の前の神社の境内では、なにやら子供が二人で遊んでい

る模様。

鬼ごっこなのか、缶けりなのかは分からないけど、仲良く子供達は遊んでいた。

「……これはタイガーに報告すべきなのか、もしくは真田に報告すべきなのか？」

ここからじゃ分からないけど……多分女の子だと思う。

「やっぱりタイガーに報告か？　もしくは僕らのEnemyポリスメン？」

そんな事を考えながら、僕はとにかくポケエ……つとする。

境内に子供がいるんじゃ、コマは多分出て来れないだろうし。

まあ、幸いもうすぐ夜。

子供はそろそろ佐薙中学校ロリコン保護団体を恐れてお家へ帰る頃だ。

お父さんお母さん、お子さんの外出には気を付けて。

ここいらにはロリコンタイガーとか、シヨタコン真田なんかがいるんだから。

喰われるぞ？

あ、でもねお父さんお母さん、お子さんが成長して10年くらいたったのなら、是非外に……

ってな事を考え、ニヤニヤしていた僕。

その時、

「あ、危ないっ！」

「……へ？」

上から、缶が降って来た。

え、缶？

で、

カコーンっ！

「痛いっ！」

脳天直撃。

「だ、大丈夫ですか……って、なんだアンタか」

そして、恐らく缶を飛ばした張本人であろう犬耳さんがこっちにやって来て……って、

「な、コマお前かっ!？」

そいつはこの白犬神社のぺちゃぱい神様でした。

「つかアンタいたんだ。全然気付かなかった」

って言って缶を探すコマ（推測12〜15）

「気付かなかったってな……」

僕は缶が直撃した脳天をポリポリ。

……ん？

アレ？

「なあコマ？」

「何？」

ちなみにコマはそこいらに落ちたと思われる缶を未だに搜索中。

「お前、あの子と遊んでたの？」

僕の指差す先、そこにはもう1人の女の子。

「そうよ」

さらっと答え、缶を探すコマ。

ちなみに缶は僕の脳天に直撃した拍子に思わず手で潰してしまい、
今更言えずに背中後ろに隠している事は秘密で。

「お前、その耳や尻尾見られてもいいのか？」

「ああ、別に大丈夫よ。もうあたし神力ないし、あの子そもそも人間じゃないし」

「ああ、そっか」

ならいいや。

それより缶、どうしよう……ん？

「なあコマ、さっきの言葉をりぴーとあふたみー？」

「……え？」

「いやだから、もう一回言って」

「……だから、もう神力ないし、あの子人間じゃないし」

「……人間じゃない？」

「うん」

頭の中で何かが繋がらない。

「人間じゃないって……もしかして神獣？」

「でもないと思う」

「思っってお前、あいつ人間じゃないの？　ってか神獣だったら僕に見られて神力無くすぞ!？」

神様の化身、神獣。

それは神通力（神力）を持つ、神社の主。

その神獣は自らの姿を「人間」に見られると、その神力を失う（弱化）。

実際コマも僕に見られて神力を失っている。

すなわち、今僕の視界にはあの子が入っているので……

神獣だったらアウト。

「大丈夫だと思う。あの子からは神様の波動を感じないし、かと言って人間な感じもしない」

コマ、何を勘づいたのか、僕の背中に回り込む。

僕、缶をベンチに座るお尻の下に。

「神様の波動って……じゃあ何者なんだよ？」

「多分だけど……妖怪とか、獣怪、半獣、人妖何かだと思う」

「もうこの世界なんでもアリだな」

その時、その少女がゆっくりとだが近寄ってきた。

……やっぱり女の子だ。

これはまた……タイガーの好きそうな……

「あ、ゴメンねリオナちゃん。なんか缶はコイツが潰しちゃったみたい」

「なっ、お前事の真相を知ってたのかっ!!」

思わずツツコミ。

コヤツ……侮れん。

一方の少女は

「あ、いや、大丈夫だから……」

ちょっと残念そうだ。

缶けり……子供は好きだもんな。

大人になると缶じゃなくて蹴りつ蹴られつの関係になるのに。

「あ、そうだ。まだアンタには言っていなかったね」

そう言うときコマは少女の横に立ち、

「この子はリオナちゃん。此度の参拝客なのである、えっへん!」

何がえっへんだぺちやばい。

無い胸張っても猫の威嚇程度にしかならん。

「ってか参拝客? 何かお願いでもあんのか?」

僕は副神様もどき（自称ピンクのイエス）。

この神社に来た願いを、神力ではなく主に肉体労働で解決する、あの意味凄い神様なのだ！

その時、さっきから黙っていたリオナが口を開いた。

「私……実はぐれちゃって、今その実を探してるの」

「実？　もしかして仲間か何か？」

「ま、まあ……一応多分そんな所かな？」

「曖昧だー！！」

つ、つまりはだ。

「コマさんコマさん、もしかしてこの子の願い、お叶えに？」

僕はコマに耳打ち。

「うん。この子お賽銭無かったんだけど、代わりにあたしと缶けりで遊んでくれたし」

「あら安い！」

「ってなわけだから、リオナちゃんの仲間の実って人を見つけてきて！」

「結局肉体労働は僕の仕事ですか！？」

ふざけるな。

今日は早く帰って、タイガーから借りた女の子ビデオを見るって予定が。

「どうせアンタが家帰ったって、いかがわしいビデオ鑑賞くらいしかやる事ないんでしょ？」

「いかがわしい言うな！ 僕は善良な人間だから、裏で襲われている女の子達の実態を把握しなくちゃいけないんだ！」

「いいから叶えてあげなさいよ、あの子実って人とはぐれて、今1人なのよ？」

「僕だって1人裏で男達に襲われている女の子の実態を把握しなくちゃ……」

「もう遊びって言うお供え物代わりの事してもらったから、今更叶えないとかダメなの！」

「じゃあお前が実探せよ！」

「じゃあその人探しの神力をあたしから奪ったの誰！？」

「ぐあっ……」

完敗。

僕はそっとコマの耳元から離れ、頭いっぱいには？マークを浮かべているリオナの前へ。

「分かったよ、リオナだっけ？　今からその実おじさんって人を探しに行こう（棒読み）」

「え、まだ実はおじさんじゃ……」

「さー行こうどんどん探そう。僕のムフフの代償はおじさん探शनのか。そーかそーか（棒読み半分涙声）」

「もしかして……泣いてる？」

「泣いてないよ。あ、ちなみに僕の名前はピンクのイエス。宜しくね」

「本名市沢和也」

「あ、コマっ！　個人情報流失の発端を僕は今日撃したぞ！」

とにもかくにも、人間じゃないらしい可愛い子供リオナの仲間（って事はそいつも人間じゃないのかな？）の搜索に、レッツ出発。

「でね、私、実に江戸城連れて行ってもらったんだ！」

「ふーん」

「そんでね、その後カラオケ行ってね！」

「カラオケかあ……最近行ってねえなあ」

「あとはね、実の学校にも行ったんだあ！」

「学校か……」

現在、コマから託されたりオナの仲間、実搜索のため、町のあちこちをリオナと一緒に回っている僕。

もう空は若干暗く、月がこんにちは。

「そう言えば、実と天の川見たっけ……」

空を見上げ、物思いにふけるリオナ。

……やっぱり、どう見ても人間の女の子にしか見えない。

「実はね、学校では卓球部に入ってるんだよ」

「卓球部か……玉打ちか……男は気持ち的に痛いスポーツか……」

「あとはね……実のお母さんからちんすこうもらった事もある」

「ちんすこうか……何となくだけど、名前の語呂がとても良い響きの食べ物だね」

「あとね、ちょっと前だけど……お風呂覗かれた事もあって……」

「お風呂かぁ……って、え！？　もしかして犯罪行為！？　事件把握のため詳しく！！」

僕は善良な市民。

今後の犯罪防止のため、過去の事件については詳しく知る必要がある！

「く、詳しくって言われても……」

困るリオナ。

……何か僕、変態さんみたいだね。

自分に負けたらダメよ和也！！

……ってか

「なありオナ、そもそもお前、実とどこで離れたの？」

「え、えーっと……」

そもそもの話だ。

「近所のスーパーだったと思う。確か、いらないうって言ったのに実がキュウリ買うって言って、私暇だから外で待ってて……」

「待ってて？」

「そしたら、何か変な男の人に襲われて……」

「何っ!？」

何故だろう？

まだ根拠すらないのに、僕の頭の中ではタイガーの顔がこんなにちは。

「そして逃げて、とにかく逃げて、気付いたらさっきの神社に……」

その言葉を口にするリオナの顔は、どこか寂しげで、切なかった。

とにかくタイガーには後で何となく手錠をプレゼントする事にして。

「……分かった。じゃあまずはそのスーパーにでも行ってみるか」

「……うん」

僕達はまず、そのスーパーへ行ってみる事にした。

「……あ」

「……げ」

案の定すぐ近くにあったスーパー。

そして僕が入店しようと自動ドアを通ったその時、向こうから見知った顔が。

「……真田？」

「最悪、まさかエロ市沢に会っちゃうなんて……死にたい」

そこにいたのは、日本シヨタコンの会に会員登録する寸前まで行った事のあるレジェンド、真田穹音だった。

そして彼女の手には買い物袋。

中にはニンジン、じゃがいも、お肉、カレーのルー。

僕は甘口派です。

「エロ市沢とは失礼な。桃色紳士とお呼び！」

「変態紳士、あんたもしかして強姦中？」

僕のネーミングの件をガン無視して、彼女の興味は僕の隣のリオナに。

「えっ……かん？」

リオナの頭には無邪気な？マークがいっぱい。

「違うよ真田、僕は君とは違って幼い子供なんかには手出ししないよ痛い痛い痛いニンジンを目に突っ込まないでゴメンなさい」

「アンタ最低っ！ 本当デリカシー無さすぎ!!」

「確かに僕はデリカシーが無いかもしれないけど、君は幼い子に対する欲求を制御するメンタルが無さすぎ痛い痛い痛いじゃがいもは目に入りませんよ真田さん」

「っ！ アンタ一回マジで刑務所行って来なさいッ!!」

そう言うと、顔を真っ赤にした真田はスタスタと帰って行ってしまった。

「なんだよ……僕は事実を言ったまでなのに」

「……ねえねえ」

「ん？ なんだいリオナ？」

「ごうかんって何？」

「それはね、実おじさんに聞きなさい」

「だから実はまだおじさんじゃ……」

それから僕はスーパーの中をくまなく探した。

お惣菜コーナー、お菓子コーナー、野菜コーナー、肉魚コーナー、飲み物コーナー、はたまたレジ近くまで。

しかし、リオナの言う実おじさんは見つからない。

「まさか、実って人はこんな娘（脳内設定）を忘れて帰っちゃくらいボケてんのか？」

「……………」

「あとはやっぱり、僕らのEnemy警察とか行ってみる？」

「……………」

「ねえリオナ…………ん？　リオナ？」

リオナは黙って俯いていた。

凄く寂しそうに…………

「…………実、本当に私を置いて帰っちゃったのかな」

空はもう真っ暗。

頼りになるのは街灯の明かりだけ。

「リオナ……」

夜道で女の子が1人だと、佐薙中学校性的夜行散歩愛好会の奴らに捕まるぞ？

「……実はね、約束してくれたんだ」

彼女の口から出る言葉は、どこか弱々しい。

「約束？」

「うん、約束……」

その時のリオナの瞳には、少しだが光るものがあつた。

「私を……河童の世界に帰してくれるって……」

「……河童？」

河童？

遠野？

妖怪？

でも見た目普通の女の子。

「あのね、言っても信じて貰えないだろうけど、私河童なんだ……」

「河童ねえ……」

見た所お皿ねえし、甲羅ねえし、水掻きねえし。

見た目本当にタイガー好みの可愛い女の子。

「……普通はみんな信じてくれないんだ。でもね、実だけは信じてくれた」

「……………」

「そしてね、河童の世界へ帰れない私に、河童の世界へ帰してやって、約束してくれたの」

「……へえ」

その時、リオナの声のトーンが少し下がった。

「でも……やっぱりそれは嘘で……実は私を置いて帰っちゃったのかな……」

そのリオナの顔はとても寂しげで、切なげで、孤独を感じた。

……やっぱり女の子のこういう顔は反則だ。

コマの時も、真田の時も。

女の子には笑顔でいてほしい。
男みんなの願いだ。

だからコマの時には副神様、真田の時には協力者として、暗い女の子に笑顔を咲かせてあげたいと思ったんだ。

やっぱり女の子は笑顔。

「……大丈夫だよ。実おじさんはリオナの事、忘れてはないさ」

「えっ……」

僕は自信を持って言う。

「だって実おじさんとの沢山の思い出があるんだろ？」

「沢山の……思い出？」

「さっき言ってたじゃないか。実おじさんと江戸城行ったんだろ？カラオケ行ったんだろ？ 天の川見たんだろ？」

「……うん」

リオナは小さく頷いた。

「普通は嫌いな人やどうでもいい人となんか天の川は見ないよ。お互い友達同士だとか、仲間同士とかとしか見ないよ」

僕は空を見上げる。

夜空いっぱい広がるは、沢山の星達。

「だからきつと、実おじさんもリオナの事、大事に思ってるよ」

「……本当？」

「ああ、本当だとも」

だからきつと、向こうも必死でリオナを探しているはず。

だとしたら、向こうはどうやってリオナを探す？
きつと、必死に向こうも探し回ってるハズだ。

手当たり次第に、今日行った場所とかを……

「……そうだ！」

僕は咄嗟に思い出す。

そう言えば、今日タイガーが言っていた。

『お持ち帰りはしねえよ、ただただ眺めるんだよ』

「ただただ、眺める……」

もしかして、これは簡単な話だったんじゃないか？

タイガーが前に言っていた。

向こうが動いた時、それを追って動くで大抵見失う。

だから、見失わないように、体は動かさず目だけを動す。

そうする事によって、ノーリスクで女の子を眺める事が出来ると。

それを『眺める』と言う。

不思議と心踊る解釈だな。

これだけ『動いて』探しても実おじさんは見つからない。

それはつまり、向こうも『動いて』探している可能性が高く、入れ違いになってるかもしれない。

ならば……

「なありオナ」

「何？」

「もう一回スーパーへ行こう。今度は入口で、動かずに待つ」

「……え？」

「向こうも必死に探しているんだ。だったら、同じ所を二度三度探してもおかしくはない」

正直、これが決め手だった。

「あ、リオナ！ お前どこ行ってたんだよ！」

「実っ！！」

スーパー入口に張ってから僅か10分たらず。

まさかのスピーディー解決を果たした。

やっぱり向こうも結構探していたらしく、汗だくだ。

「全く……なんでキュウリをレジに通す間くらい、じっと待っていられなかったんだよ」

「だって……知らない人に襲われて、逃げてたから……」

……そうだ、後でタイガーにはパトカーの玩具を贈呈しよう。

ちなみに今僕はスーパーの入口にある自販機の後ろ。

二人の邪魔しちゃ悪いから、ここに隠れてます。

そろそろ退散の時か……

「襲われたって……もしかしてナンパか？」

「いや違う。なんか、二次元みたいな可愛い子がいた！　って、小柄な男に……」

二次元？

小柄な男？

……あ、それタイガーじゃねえ！

達知太智だ！

18禁書目録の方だ！

そういやタイガーは眺めるだけで、襲うとは言って無かったし。

パトカー玩具は太智行きに変更。

「ん？　……まあとりあえず帰ろうぜ。サミも待ってる事だし」

「うん！」

そう言ってスーパ―を後にする二人。

リオナには、しっかりと笑顔が戻っていた。

なんか……暖かい終わりがたで本当に良かった。

しかし、実際そうでも無かった。

「ただいまコマ。なんとかリオナの仲間を探して来ましたよ……ん？」

もう夜分遅く。

一応神社に来てみた僕。

それが過ちだった事に気付いたのが、約1分後。

「あ、お帰り！ リオナちゃんの仲間、見つかったんだ！」

コマはぞくぞくベンチに腰掛け、足をバタバタ。

「ああ、すげえ大変だったよ。まさにスーパー往復祭りでさ……」

スーパー

この言葉が命取りになろうとは。

「え？ スーパー行って来たの？」

何故か犬耳をピンと立てて。
しっぽフリフリさせちゃって。

「え、まあ、行ってきたけど……」

「じゃあお土産ちょうだい！」

速答。

「は？ お土産って何？ あれか？ 人の股みたいに先割れした大根とか？」

スーパー唯一のエロス。

「違う違う！ クッキーだよ、骨っこクッキー！！」

コマの瞳はギンギラギン。

「骨っこクッキー！？ 聞いてないぞ、そんなモン！」

「気をきかせて買ってきてよ！！」

「何故だ！？」

何故、コマはクッキーが無いと分かるや否や、急に怒りだした？

理不尽すぎる！

「いいから、今すぐ買ってきてよ！」

コマは結構ご機嫌ななめ。

「え、今から？　僕はもう帰ってビデオ鑑賞のお時間なんだけど…」

「いいから買ってこい！！」

うおっ、今日のコマはなんか機嫌悪すぎ！

いつもはもうちょいマシなのに……ん？

今日だけ不機嫌？

「……コマ、もしかしてだけどさ」

「な、なにっ！？」

突然の問いかけに、ベンチの上で固まるコマ。

「今日1日僕はリオナに付きっきりで、コマに構ってやれなかったから……寂しかったのか？」

「ッー！？」

その時、一瞬で真っ赤になるコマの顔。

「はーん、当たりだな？」

「だ、だだ誰がアンタなんかっ、べっ別に……!!」

めっちゃくちゃ動揺してますね。

へっ、たまに可愛いヤツだ。

「……顔、真っ赤だぞ？」

「え……あ、これは違うっ！　ただ今日は暑かったから……」

コマさん、目が泳いでますよ。

思わず僕、ニヤニヤしちゃう。

「……コマ、今クッキー買ってきてあげるからな、もうちょっと我慢しててな（にこっ）」

「……ッ!!!!」

その日はなんだか、暖かい1日だった。

最後、コマに思いっきりグーで殴られた事以外は。

番外幕 犬と河童とエロ魔神とタイガーと佐藤中学校ロリータ愛護団体（後書き）

ミスターさんの方を見てからこっち見ると、キャラ崩壊気味ですね。

ミスターさんファンの方、申し訳ない。

第八幕 あれはかつての古代ローマ帝国、カエサルが所持していたと言われる伝

真田穹音、享年15歳

彼女は、頑張った。

自らの欲望により、その身体には微量の電流が走る。

彼女は幼き男児に性欲し、自らの身体に電流を走らせる。

もがき苦しんだ。

恐ろしい程の微妙な痛み。

しかし、目の前には幼き男児。

彼女はますます欲求が抑えられなくなる。

そして、その度に彼女は電流に苦しんだ。

時には血を吐き。

そして身体には焼き傷。

微妙の電流により脳は正常さを失い、彼女は本能のままに行動した。

幼き男児に飛び掛かり、その純潔を喰らう。

電流が走る。

しかし、もはや彼女には関係ない。

ただ、目の前の幼き男児を喰らうのみ。

いただきます……

彼女は快楽の道へと、堕ちていった。

真田穹音、最後の言葉

「市沢、アンタ早く鍵を探しな……痛ッ！ も、もう……ダメ……」

ありがとう真田穹音

君のおかげで幼き子供への欲求のあり方について、考える事ができた。

さようなら真田穹音

君の勇姿を、僕達は一生忘れない！

勇者真田穹音に栄光あれ！！

「私はまだ死んでないわよッ！！」

ドカッ

「ぐはっ……」

ミニスカート履いてるくせに、階段でお尻を隠す女子高生達に喝を入れたいな。

僕の名前を知ってるかい？

市沢和也だヨ！

「ってか、私は幼い子供なんて襲ってないしっ！」

ドカッ

「ぐはっ……」

あの公園事件の翌日。

現在朝早くて、まだ僕達以外誰もいない学校。

なんだかイケない空気がたつくさんだ！

結局あの後。

真田は気絶寸前まで痺れていた。

大量の電流が身体を走ったせい、手足が動かない、呂律が回らない。

顔は痛みの表情だったけど、顔色は欲情中よろしくの赤色。

このまま公園に放置してゾクツとSプレイつてのも良かったんだけど、さすがに僕の良心的にアウトと判断。

真田を引きづりながら真田自宅へ。

とりあえず外のテラスに真田を放置して、僕は帰宅。

ちなみにまだ、ビリビリさんの鍵は見つかっていない。

つまり、真田の腕には未だにビリビリさんがこんにちは状態。

「と、とにかくまずは鍵を探さないと……」

じゃないと、真中に怒られる。

「全く……本当よ！ 市沢、早く見つけてきなさいッ！」

僕は奴隷かよ……

「魚を食べると頭良くなるって言うけど、中には例外もあると思うんだよエロ魔神くん」

「す、すみません真中さん……」

その日のお昼、学校の昼休みの時間。

僕は真中にビリビリさんの返却を求められていた。

ちなみに今日の給食は魚でした。

「ふう……エロ魔神、お前本当に鍵をなくしたのか？」

「……申し訳ねえ。多分公園のどこかにはあると思うんだが」

うん、真中には正直に鍵をなくした事を告白。

「全く……ビリビリさんは今夜使う予定だったのに……」

頭を抱え、うなだれる真中。

真中はイケメンだ。

だからモテるんだ。

「今夜はビリビリさんを麻希さんに、ロープ縛りくんは香緒里さんに、ブルブル振動マシーンは高美さんに使う予定だったのに……」

真中はイケメンだ。

だからモテるんだ。

……熟女に。

需要供給の問題。

「ビリビリさんがなかったら、麻希さんを楽しませてやれないじゃないか……」

ちなみに麻希さんってのは本名沙藤麻希、年齢41。

真中のストライクゾーンは未知数だ。

理解不能。

「申し訳ない真中、今度僕のお気に入りのお宝本を貸してやるからさ、許して」

僕の謝罪に真中はひとつため息。

「出来れば熟女水着大図鑑なる本を貸してくれエロ魔神。そしたら今回の件はCHARRAにしてやる」

「マジで？ そんな本僕持ってないよ？」

そして何故CHARRA？
イントネーションハチャメチャ。

「……ところでエロ魔神」

「ん？ 悪いがそんなマニアック本は持ってないぞ？」

「違う違う」

CHARRAの件を半ば無視した真中、突然真顔になり僕をにらみつける。

……何？

「お前今、ビリビリさんどこにある？」

「……………あ」

フリーズin僕。

「鍵なくしたって事は、何かに使ったんだろ？」

「……………うん」

「ならスピアの鍵作るから、鍵穴となるビリビリさん本体を持って来て欲しいのだが……」

「ああああああ……」

声が出ない。

しまったああああ！

まだビリビリさん、真田の腕にマキマキ中だ！

そうだよ、鍵なくした事を素直に言えば、スピア鍵作るからって本体を要求されるよな普通！

sonで真田本人を連れて行く訳にはいかないし！！

しまった！

修羅場だ！！

「ま、真中くん！」

「あ？」

誤魔化せ、誤魔化せ僕！！

真中に勘ぐられないように……

「あ、その……その事なんだけどさ」

「なんだ？」

言い訳を考えろ僕！

「じ、実はな」

「ん？」

「昨日な」

「ああ」

「その……え、エロゲーやってる時にな」

「……………」

「その、あの……僕はエロシーンに興奮してな」

「……………」

「す、凄く興奮してな」

「……………」

「……思わずビリビリさんを食べてしまったんだ」

「お前ビリビリさん壊したな？」

「ひゃひゃひゃー！」

壊してはいない！

って言葉が出て来ない。

恐怖で呂律が回らない。

真中の顔、怖い。

「正直に言え、お前ビリビリさんをどこにやった？」

「いや、その、あの、えーっと……」

僕の視線は空中をスイミング中。

「目をそらすな」

「すみませんっ！」

くそっ……どうする？

真田シヨタコン説は口が裂けても言えない。

かと言って、ビリビリさんの居場所は真田の腕な訳だし。

どうする？

僕自慢のムフフトークで話をそらすか？

「……正直に言え」

あ、無理そうな雰囲気だ。

「……真中よ」

「なんだ？」

「正直に言うよ」

「ああ」

「僕はお姉さんが好きだ」

ドカツ

「ぶはっ！」

「誰がお前の好みのタイプを正直に言えと言った！」

くそっ……一か八かのムフフトークも失敗。

「うう……」

万策尽きたっ……

「……怒らないから正直に言えエロ魔神」

「もう既に怒ってるじゃないかっ!!」

真中め……手強い。

もう、この際壊しちゃった事にするか……

その方が楽だ。

命的な意味で。

「……実はな」

僕は死んだ飛び魚の目をしながら、真中に無実の死刑判決を受け入れる事を受理しかけた、

その時……

「……なあエロ魔神」

「ん？」

「あれはなんだ？」

「へ？」

突然、僕の後ろを指差した真中。

そして僕は、その指差した方向へ視線を向けた。

「穹音、そのブレスレット何？」

「あ、ああコレ？　こ、これはその……まあ、あ、新しいファッショナルな？」

「穹音？」

目の前には、真田穹音とそのお友達である女子と仲良く談笑中。

しかし、そこに真中の目は光った。

「……クラス委員長真田穹音の右腕を見ろ」

「真中、それは錯覚だ！　あれは古代ムー大陸へと繋がるゲートの通過チケットなんだ！」

真中シカト。

「あれ……ビリビリさんじゃね？」

「だからアレはビリビリさんなんかじゃない！　アレはかつての古代ローマ帝国、あのカエサルが所持していたと言われる伝説の浮気発覚防止道具の1つであって……」

「……ちょっと行ってくる」

「真中あああ！！」

修羅場って言葉を最近連呼しています。

第八幕 あれはかつての古代ローマ帝国、カエサルが所持していたと言われる伝

不定期連載。

性格診断のコーナー。

あなたの選んだキャラで私神的占い（性格診断）をしましょう。

次の中から、1人だけ適当にキャラクターを選んで下さい。

- A、エロ魔神
- B、ぺちゃぱい神様
- C、脱衣麻雀界のタイガーマスク
- D、シヨタコン委員長
- E、18禁書目録
- F、真中

市沢

「なんかまともな名前のキャラいねえな、この小説」

真中

「何故俺だけ名字？」

Aのエロ魔神を選んだあなた。

あなたは素直な心の持ち主です。

なんだって、エロと書かれているこの選択肢を選んだ時点で、あなたは欲望に素直な人間なんだと分かります。

そんなあなたは素直に欲望のままに生きると、大抵修羅場に巻き込まれますので、たまにはエロを自重する事をオススメします。

そんなあなたのラッキーアイテムは好きな子のリコーダー。

ペロペロせずに、眺めるだけにとどめておきましょう。

Bのぺちやぱい神様を選んだあなた。

身体的コンプレックスに悩まされているでしょ？

身長が伸びなかったり、未だ胸が平将門だったり。

あと、影が薄いと周りから言われませんか？

メインヒロインなのに出演が少ないとか、マジあり得ない人間ですよ？

胸といい影といい、もっと自己主張すべきです。

自分の個性を大切にして生きましょう。

ラッキーアイテムはガリンガリン君紅しょうが味。

これを食べると嫌でも注目の的になりますよ。

Cの脱衣麻雀界のタイガーマスクを選んだあなた

このロリコンめ……って言われるでしょ？

あなたは全てにおいて可愛さを追求する人間です。

子犬しかり、子猫しかり、小学生しかり。

そのあまりの可愛さへの執着心から、ロリコンと誤解を受けやすいです。

そんなあなたには某小学校バスケットラノベをオススメします。

より一層可愛さへの執着心に磨きがかかり、ロリコンからロリペドへと呼び名も変わるでしょう。

決して私は某小学校バスケットラノベを批判している訳ではありません。

むしろラノベ推奨です。

私は、あなたを批判しているのです、このロリコン！

ラッキーアイテムは赤いランドセル。

ラッキーボイスは

「まったく、小学生は最高だぜ」

Dのシヨタコン委員長を選んだあなた

他人には言えない隠し事をしていませんか？

例えば、社会的にアウトな欲情とか。

自分の立場上、他人には打ち明けられず、心の内にモヤモヤと。

そんなあなたにオススメするのが、小学生マニアックなる本。
児童ポルノギリギリ。

これさえ読めば、全ての欲望が満たされるハズです！

さあ、どこぞの委員長と一緒に日本シヨタコン連盟の会へ入会を！
しかし、もしその欲望を無くしたい場合は、Aの選択肢を選んだ人と仲良くするのが吉。

ラッキーアイテムはビリビリさん。

Eの18禁書目録を選んだあなた

オタクですね。

そんなあなたは一方通行な気持ちを持っているハズ。

何に対して？

アニメキャラへの気持ちがだよ。

二次元エロという枠に捕らわれず、たまには現実へと目を向ける事をオススメします。

社会的に悪く見られがちなオタクですが、私は否定しません。むしろ暖かな目で見守らせて頂きます。

あなたの嫁（婿）は、誰ですか？

ラッキーアイテムは禁書目録（実物の）

Fの真中を選んだあなた

つまらない人間です。

他にもっとツツコミ所満載の選択肢があったにも関わらず、何故無難な真中を選んだんですか？

もっと自分に正直になって良いと思います。

複雑な家庭環境のせいなどもあると思いますが、もっと自分に正直に生きて、みんなと共に変態の道へと足を進めては如何？

ちなみに私は熟女とメガネ娘は無理な人間です。

ラッキーアイテムは熟女水着大図鑑

コマ

「どの選択肢選んでも結局はヒドイ内容……」

市沢

「僕はAを選択したんだけど……リコーダーはペロペロしちゃうよ
実際」

コマ

「……はぁ」

第八幕外伝 **メインヒロインの活躍をお待ちになっていた方、ここをクリック！**

第八幕外伝です。

第八幕の裏では、こんな事が起きてました。

今回はメインヒロインなのに出演が少ないコマさんへの救済措置回です。

第八幕外伝 メインヒロインの活躍をお待ちになっていた方、ここをクリック！

これは、真田穹音が公園にてビリビリさんに殺されかけた、あの日の出来事。

時系列的には、真田を自宅に運び終えた後。

僕は一応の事を報告しに、白犬神社を訪れていた。

「おーいぺちやば……じゃなかった、コマさんはいるかあい？」

お空は橙色、夕方。

何か夕方の神社って寂しい雰囲気があるよね？

石畳に伸びる影。

不気味。

「うお……なんか雰囲気あるな……」

とにかく、僕はコマに会いに境内へ。

案の定、コマは例のぞくぞくするベンチに腰掛けていた。

「……あ、和也あ!？」

「……おう」

階段を登ってきた僕に気付いたコマ。

何だか凄い勢いでこちらへダッシュ……ん？

「やっと来てくれたあ! 今日はまだ来てくれないかと思ってたよ!」

「……あ、ああ。すまん?」

あれ？

何か違和感。

コマ、むっちょ笑顔。

しっぽフリフリ。
耳、ピクピク。

ん？

「ねえ和也、何で今日はこんなに遅かったの？」

小首を傾げるコマ。

……何だこの違和感？

なんか女の子ビデオを見てる時に、学生設定の女の子なのに妙にケバい時におこる、あの違和感。

「いや……今日もほら、とあるシヨタコンの願いを叶えてたから」

僕は苦笑い。

「もう……遅くなるなら遅くなるって言ってよね！」

何故だ……！？

今日のコマにはとてつもないオーラを感じるのだが。

何か女の子ビデオみたい。

「ああ……すまん」

とりあえず謝っておく。

一方のコマは超が付く程の笑顔。

顔は赤く、林檎みたい。

しっぽははち切れんばかりにフリフリ。

「……なんか、おかしくね？」

僕はなんとなく呟いた。

ちなみに、いつものコマさんは……

「やっときたわね。骨っこクッキー持ってきた？」

「え、持ってきてないの？ もう、使えない神様ねえ！」

「この変態っ、だれがぺちやばいだ変態っ!!！」

みたいに、辛口さんなのに。

今日のコマは……

「ねえ和也、今日は何時までいてくれるの？」

「……コマ、頭でも打ったか？」

なんか女の子ビデオよろしくの、純情少女になっていた。

「あたま？ 別にぶつけてはないけど……」

頭を押さえ、ハテナマーク放出中。

「……………」

僕は言葉が出ない。

なんだこのコマ？

めっちゃ可愛い！！

「どうしたんだよコマ、何で突然、急に僕得なキャラに！？」

これはアレだよ！

フォーエバー的な僕の空想のリアル化だよ！

「僕得？ 何それ？」

相変わらず小首をかしげるコマ。

むあっ……小首かしげるなんて、リアルではビデオの向こう以外ではあり得ない仕草。

「それよりも和也、アタシ何か今日はウキウキな気分なんだ！」

「うん、何故だか僕もウキウキさ！」

何故だ!?

何故今日のコマは忠犬のごとき素直な性格で、なおかついじらしいキューティクルな態度をとっているんだ!?

しかも顔まで赤らめちゃって……

何か裏でもあるのか?

「ねえ和也、今日は1日中1人で寂しかったんだ」

「そうかい……それは悪い事をしたね」

……まあ、いいや。

今日はたまたまコマの虫の居どころが良かったって事で括りましよう。

だって、こんな僕得コマなんて初めてなんだもん!

「だからさ和也、1つだけアタシのお願い、聞いてくれる?」

「ああいいとも! コマのお願いでもめんまのお願いでも、なんでも叶えてあげるよ(ニヤニヤ)」

「本当に?」

「ああ本当だとも! 何なら神に誓ってもいいくらいさ(ニヤニヤ)」

「本当？　じゃ、じゃあお願い言うね！」

「ドオンと来いデェス！！」

「じゃあ……アタシと一緒に交尾しよ！」

「よし、いいぞいいぞ今日の僕はなんでも願いを……ん？　あ？
え？　何？」

「だから、アタシと交尾して！」

「……………え？」

「だから、こ・う……」

「ぐあなりたはわけちひりゆなさあみひやいひゆをいはぶあッ！？」

市沢和也脳内回線オーバーヒートしました。

復旧までしばらくお待ち下さい。

コマは顔を赤らめ、目をトロンとさせ、恥じらいを持ちながら言った。

何を？

……こ、こここここ交尾ってこ、こここここ言葉を。

僕、思わずぼーん。

「ねえ和也、聞ってる？」

おーいおーいと僕の目前で手を振るコマ。

……ちよいと待て。

「……なあコマさん、コマさんよ」

「ん？　なあに？」

相変わらず小首をかしげるコマ。

「お前……変なモンでも食ったか？」

人間的アルファベットHと、動物的交尾は方向性が違う事を先に言っておこう。

「変なモンなんて食べてないよ？」

人差し指を口元に当て、うーんと考えるコマ。

さっきからのその動作1つ1つが反則です。

「それより和也、交尾交尾！！」

「ぐあああああっ！ どうしたんだコマっ！」

今日のコマは何かおかしいぞ絶対！！

やけにご機嫌だし！

僕は思わずコマの肩を掴み、わっさわっさと前後に揺らす。

「おかしいよおかしいっ！ コマはキャラ的に僕のムフフに対してツツコミを入れるタイプのキャラだろ！？ なのに何でツツコミのお前がボケに……」

キャラ崩壊。

最近のコマはあまりにも出番が少なく、キャラを崩壊させる事によって目立とうとするキャラクター的心理現象。

「何言ってるの和也？ それよりもアタシを揺らす暇があったら、服脱いで！」

「ぐはっ……」

市沢和也、思わず吐血。

「アタシも……その……準備するから……」

「なんだこれ、なんだよこれ!!」

僕の中の悪魔が囁く。

『僕の初めてにバイバイする時が来たな。せっかくだからヤッておけ相棒!』

僕の中の天使が囁く。

『今日のコマは何かおかしい! 相棒、ここは我慢して、初めては後のお姉さん相手にとっておけ!』

ぐああああ、僕の頭の中で悪魔天使の戦争が勃発した!

その時、僕の中の理性が一言。

『背徳感マジハンパねえなこれ』

「……ねえ和也、いいでしょ?」

コマの上目遣いに僕ちんキュンキュンっ!!

相手は正体不明の犬耳少女だぞ!?

常識的に考える僕!

アウトだろ!

悪魔

『ヤッておけヤッておけ、もしかしたらこの先、下手したらお前魔法使いになっちまうかもしれないんだしよ!』

天使

『相手は意味不明の未確認生物的なコマですよ? 人間的に考えなさい!』

理性

『背徳感っ、背徳感一本サアっ!!』

ああ……僕の理性が壊れた。

背徳感一本て?

……ん? あれ、僕の理性が壊れたって事は

僕、本能むき出し?

悪魔

『今だっ、滅びのバーストストリームっ!!』

天使

『ぎゃああああっ!』

「……コマ、ふつつか者だけど宜しくな」

僕はズボンを脱いだ。

夕闇の神社の境内。

僕のおニューなパンツが風になびく。

「和也……あ、アタシの方こそ宜しく……」

コマの顔は真っ赤。

美しき恥じらい。

ドキドキ。

場所を移し、神社の裏。

ここなら人は誰も来ないだろう。

「コマ……」

「和也……」

相手は人間ではない。

犬耳生やした女の子だ。

ある意味、未確認的な生物だ。

しかし彼女は可愛い。

僕を求めている。

その瞳は美しい。

その頬は紅く。

その吐息は甘く。

ちなみに今の僕はパンツ一丁だ。

コマははだけた巫女装束を纏い、地面に横たわる。

夕闇の中、お互いの吐息だけが辺りに響く。

R指定の変更を作者に求めよう。

こっから先は初めてバイバイ的な大人の世界。

お子様は戻るのボタンをクリックしな。

「コマ……いいんだね？」

僕の頭の中では悪魔がふんぞり返っている。

「うん……め、メチャクチャにしているよ?」

視線を僕からそらすコマ。

その恥じらいがまたべりーぐっと！

「じゃあ……」

僕はそっと顔をコマの顔に近付ける。

初めはキスから（ネット情報）。

昂る高揚感。

背徳感もすごい。

僕はそっと、コマのはじける唇に……

さあ、夜は始まるよ……

その時。

「ねえお母さん、ポチが電柱に向かって腰振ってるんだけど」

「こらみーくん、ポチを凝視するんじゃないやありません！」

「でも何でポチは腰振ってるの？」

「それは犬特有の発情期……って言ってもみーくんには分からないか」

……意外と近くから聞こえた、何気無い親子の会話。

親子でペットの犬の散歩ですか。

家族っていいですね。

……そういや今、動物達は発情期って時期を向かえてるらしい。理科で習った。

この時期は自然と性欲が増し、子作りに励みたくなる本能みたい。発情期の動物には愛とか恋とかはなく、単純に子作りしたいっていう欲情的本能のみで動く。

「ハアハア……」

「……あのー、こ、コマさん？」

「何？ 早くして！」

「いや済まない、ちよいと不粋な事をお聞きしたくてね」

「ん？ あ、アタシの敏感部分は下の……」

「僕の事、愛してるから交尾って言ったの？」

「え？ 別に」

「……………」

……………。

「別に愛してるとかはないわ。とにかく気持ちよくなりたいの！」

「……………」

「さあ早く！ アタシを満足させて！」

「……………」

僕はズボンを履いた。

「愛してるとか片思いとか、僕はそういうピュアムフフを三次元に求めているのだよ！」

狛犬にも発情期ってあるんですね。

あれからコマはお一人様で頑張ってます。

もうR15は覚悟だね。

僕はもう心がメチャクチャになったので退散。

純潔と魔法使いは紙一重。

「なんてこったい。今日の僕得コマの正体は発情期がための偽りのコマだったなんて……」

僕はついつい涙の雨を頬に降らす。

あんなに可愛くて、甘えん坊なコマは、ただ単に発情期がための欲情からくる性格だったなんて……。

天使

「だから……言ったのに……ガクッ」

滅びのバーストストリームを喰らった天使はご臨終。

全ては理性に委ねるべきだったのだ。

……けど。

「成り行きでああはなったモノの……」

何故だろう。

コマにはあんまし異性としての魅力を感じないんだよなあ。

コマはコマなんだよな。

「……まあいいか。これでしばらくはコマの弱みを握った訳だし」

僕は神社の階段を降りながら思った。

「コマの発情期か……やっぱりコマも犬なのかなあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6310t/>

私の神社へいらっしゃい！！

2011年10月7日18時05分発行